

# 平成15年度 浪岡町文化財紀要 IV

## I 浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 第11集

平成15年度 浪岡町上下水道工事に伴う発掘・立会い調査報告書  
(浪岡城遺跡・岡本遺跡・羽黒平(1)遺跡)

## II 平成15年度 浪岡町文化財パトロール調査概報

## III 浪岡町文化財・浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 一覧

2004. 3. 26

浪岡町教育委員会

# 平成15年度 浪岡町文化財紀要 IV

## I 浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 第11集

平成15年度 浪岡町上下水道工事に伴う発掘・立会い調査報告書  
(浪岡城遺跡・岡本遺跡・羽黒平(1)遺跡)

## II 平成15年度 浪岡町文化財パトロール調査概報

## III 浪岡町文化財・浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 一覧

2004. 3. 26

浪岡町教育委員会

発掘品写真集



岡本遺跡 SX05 出土の越中瀬戸天目茶碗

## 発刊にあたって

本年度の町内では、当教育委員会が浪岡城遺跡・岡本遺跡・羽黒平（1）遺跡の発掘・確認調査、県埋蔵文化財調査センターでは山元（1）遺跡、野尻（3）遺跡をはじめ、史跡高屋敷館遺跡の周辺部を調査しました。

本紀要では、町教育委員会関係の発掘調査を掲載し、さらに平成15年度における文化財パトロールとこれまでの町教育委員会刊行の発掘調査報告書一覧をまとめ、年度内の成果として公表いたします。

市町村合併に係る全国的な動向の中で、浪岡町も京都青森市と合併協議の回を重ねております。しかし、地域のアイデンティティーである遺跡は、地域から切り離して存在し得ないものです。そして現在に生きる我々は、この遺跡を地域の宝として、未来へ引きつぐ責務があります。

今回の調査成果に表されるように五百年、千年の単位から見ると、浪岡町も青森市も津軽でさえも一過性の行政区域でしかないことに改めて気づきます。

さらに、長い歴史を経た遺跡や文化財が、過去の歴史だけではなく、地域の特性や将来像までも現在の私たちに語りかけてくるようです。それゆえに我々は、その声に耳を傾け、市町村合併に左右されない文化財保護行政を、継続してゆく必要があることを痛感しております。

浪岡町では史跡高屋敷館遺跡の環境整備をはじめとし、諸発掘調査や史跡浪岡城跡の公有化及び第二次環境整備など歴史の街を冠するにふさわしい事業をこれからも粛々と進めてまいります。今後とも、関係各位に於かれましては、旧に倍しての御力添えをお願い申し上げます。

最後に、ご指導・ご協力を賜りました皆様に記して感謝の意を表するものであります。

平成16年3月26日

浪岡町教育委員会

教育長 成 田 清 一

## 例 言

- 1 本紀要は、平成15年度に浪岡町教育委員会が実施した文化財関係事業に係る報告である。
- 2 町上下水道工事事業に伴ない行った発掘調査・工事立ち会いについては、史跡隣接地を発掘調査とし、周知の埋蔵文化財包蔵地に含まれない部分については工事立ち会いとした。
- 3 本書の構成は下記のとおりであり、それぞれの編集及び主な執筆担当を（ ）内に記した。
  - Ⅰ 平成15年度 浪岡町上下水道工事に伴う発掘・立会調査報告書（木村浩一・竹ヶ原亜希）
  - Ⅱ 平成15年度 文化財パトロール調査概報（小川桐勝昭）
  - Ⅲ 浪岡町文化財・浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書一覧（竹ヶ原亜希）
- 4 図版・写真・表などの番号は、各報告で独立しているため、全体としての統一は図らなかった。
- 5 上下水道工事に伴う調査で、工事対象箇所は東側が羽黒平（1）遺跡。五本松字岡本内部分を「岡本遺跡」、史跡浪岡城跡の無名の館部分（史跡北側隣接地）を「浪岡城遺跡」と仮称した。
- 6 「岡本遺跡」と仮称した範囲は、西側と南側を鷺谷塚までとし、東を苗代塚、北側を五本松字岡本の住宅地内を流れる塚までとした。
- 7 「浪岡城遺跡」と仮称した範囲は、西側を浪岡八幡宮とし、東側を鷺谷塚（流路西側）、南側を史跡境界線、北側を鷺谷塚北縁までとした。
- 8 「浪岡城遺跡」「岡本遺跡」と仮称した部分は、遺構・遺物の確認後に遺跡の登録を行った。
- 9 調査区は、史跡浪岡城跡を北・東・西とも大きく上回る範囲となるため、従来の発掘調査区を用いず、国家座標を元にした新たなグリッド配置を行った。  
新グリッドは、座標系10系の座標原点からX軸+80.0km、Y軸-19.0kmをMA100グリッドとし、南北をアルファベット2文字の組み合わせ、東西を算用数字であらわしている。  
グリッドの基本単位は10m×10mとし、グリッド名称は基準を北東にある杭とする。  
また、南北のアルファベットは、MAからMJまで、東西は算用数字の10グリッドを1単位にした100m四方をもって大グリッドとした。なお、南北は北から南へ、東西は西から東へ昇順とする。
- 10 浪岡町下水道工事に伴う発掘調査・立会い報告書の作成にあたり、次の方々からのご指導を賜った。  
（敬称略・順不同）  
井上喜久男、藤澤良祐、宮田進一、高橋與右衛門、前川要、飯村均、山口義伸、佐々木浩一、平田慎文、村田淳、柳原道高  
なお、町教育委員会生涯学習課工藤清泰文化班長が、調査における全体指導を行った。

# 目 次

発刊にあたって

例言・目次

I	浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 第11集	
	平成15年度 浪岡町上下水道工事に伴う発掘調査・立会い調査報告書	
	(浪岡城遺跡・岡本遺跡・羽黒平(1)遺跡)	
	第1章 調査に至る経緯	2
	第2章 調査経過(発掘調査日誌より抜粋)	6
	第3章 検出遺構と出土遺物	10
	1. 浪岡城遺跡	10
	2. 岡本遺跡	32
	3. 羽黒平(1)遺跡	52
	第4章 まとめ(発掘抄録)	53
II	平成15年度 浪岡町文化財パトロール調査概報	71
III	浪岡町文化財・浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 一覧	77

浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 第11集

平成15年度 浪岡町上下水道工事に伴う

発掘・立会い調査報告書

（浪岡城遺跡・岡本遺跡・羽黒平（1）遺跡）

## 第1章 調査に至る経緯

近年、浪岡町では下水道及び農村集落排水整備事業により、全町に及ぶ開発の手が入っている。今回、五本松地区に下水道整備事業が延長してゆくこととなり、浪岡城跡に隣接した(旧)県道青森浪岡線(旧 大豆坂通り；まめさかどおり)に本管を埋設することとなった。

平成14年12月26日に、史跡指定地内である「新館地区」に下水道工事が行われる旨の事業計画が、上下水道課長から生涯学習課長に申し入れられた。この際、事業に係る手続きと調査時の予算見積もりについての照会があったため、町教育委員会では、1月8日付で史跡指定地内の現状変更手続きについてと調査費用の積算を提出した。

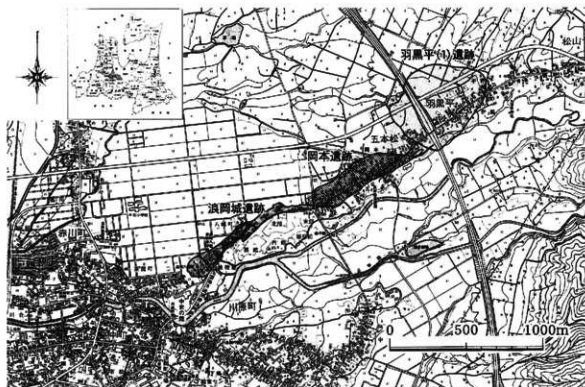
同地域には「地権者会」が設立されており、公有化についての陳情もなされている。また、町教育委員会でも将来的には公有化の方向性を「新館地区保存管理計画」で確認していることから、工事よりも保存処置を優先したいという回答を行った。

結果、新館地区についての下水道工事は見送られたが、工事予定路線が浪岡城跡「無名の館(外郭)」を横断するものであり史跡指定地に準じた対応が必要となることから、主要工事部分についての発掘調査を行うことにした。また、近接する羽黒平(1)遺跡と史跡との間についても工事立会いにより遺構及び遺物の検出に努めることとなった。

検出遺構は本調査全体でSI7棟、ST6棟、SE13基、Pi140基、SX34基、SH8条、SD4条、SF2基の計114遺構となった。ただし、全体をとおして狭窄な調査区であったため、遺構も部分のみの検出となった。したがって、遺構種類については推定の域を出ない。今回報告の遺構名は仮称としての報告であることを付け加えておく。

以下、調査要項参照。

図1 調査遺跡位置図





## 平成15年度 下水道工事に係る発掘調査要項

### 浪岡町教育委員会生涯学習課

#### 1. 調査の目的及び経緯

今年度の調査は、(旧) 泉道首森浪岡雑に敷設される下水道工事に伴う発掘調査である。周知の埋蔵文化財包蔵地内に係る部分の調査はもとより、史跡隣接地及び遺跡内であろうと判断される箇所について工事前に調査を行うものである。

調査は延長1.6km以上に及ぶ範囲であり、同時に数箇所の工事箇所を調査することとなるため、全体を下記の3遺跡にわけ仮称を付した上で調査を進める。

なお、今回の下水道工事予定については、平成14年度に浪岡町上下水道課から工事に係る協議があり、平成15年度着工に先立ち重要部分については発掘調査を行うことで合議済である。

#### 浪岡城遺跡

今年度の調査箇所は、史跡指定地外であるとはいえ明らかに「無名の館(外郭)」を横断するものである。史跡指定地外の部分でも指定地境界線に隣接し、数メートル外側に沿った道路を掘削する。このことから、史跡である「浪岡城跡」としてではなく、古代・中世の「浪岡城遺跡(仮称)」として調査する。

なお、工程の中ほどでは昭和60年に泉道(当時)の付替え工事に伴う発掘調査を行い堀跡を検出している。

調査終了後は現在の地表から1.8m程度掘削してしまう計画である。このため、調査(一部立会い)を行い、記録保存を図ることを目的とする。

#### 岡本遺跡

周知の埋蔵文化財包蔵地である「羽黒平(1)遺跡」と史跡浪岡城跡に挟まれた部分を「岡本遺跡(仮称)」として調査する。これは、五本松地区が江戸時代から継続して村として存在していたこと。伝承にある中世の「七日市町」に係る遺構が広がっている可能性があること。羽黒平(1)遺跡が、史跡浪岡城跡新館地区まで広がる可能性が考慮されること。などのため、その路線に沿った今回の工事箇所は、古代・中世・近世の集落跡が残されている可能性が高く、事前の調査が必要となっている。

なお、本調査区も浪岡城遺跡と同様に、調査終了後は現在の地表から2.4m程度掘削してしまう計画である。このため、立会い調査を行い、記録保存を図ることを目的とする。

#### 羽黒平(1)遺跡

周知の埋蔵文化財包蔵地である「羽黒平(1)遺跡」のうち、苗代塚と東北縦貫自動車道間の道路敷きを対象とする。

#### 2. 調査地及び所有者

調査地はすべて旧泉道(現在は町道)であり、浪岡町の管理となっている。調査対象地域は別添函参照。

### 3. 調査面積

浪岡城遺跡	約 8 6 0 m <sup>2</sup>
岡本遺跡	約 7 5 0 m <sup>2</sup>
羽黒平(1)遺跡	約 1 9 0 m <sup>2</sup>

### 4. 調査期間等予定（期間中に所定の日数を行う）

浪岡城遺跡、岡本遺跡ともに

準備作業	平成15年4月1日	から	平成15年5月上旬
調査作業	平成15年5月上旬	から	平成15年8月31日
整理作業	平成15年9月1日	から	平成16年3月31日
報告書作成作業	平成15年12月1日	から	平成16年3月3日

### 5. 調査体制

浪岡町教育委員会 生涯学習課

課長	常田 典昭
課長補佐	鎌田 廣
文化班長	工藤 清泰
文化班班主任査	小田桐 勝昭
文化班班主任査	木村 浩一（発掘調査担当）
臨時発掘調査員	竹ヶ原 亜希
調査補助員	斎藤 とも子
調査作業員	蛭名 勝弘、藤本 範子、吉川 瑠枝、 対馬 とも子、山田 義憲、工藤 美香、 平井 顕司、由町 佳奈子

### 6. 調査方法

今回の調査対象地は、延長1.6km以上あるが、下水道工事という特殊性のため幅が1m程度となる。また、主要地方道であり昼夜を問わず交通量が多いことから、交通を遮断しての調査及び長期間の調査が困難である。

これらのことから、事前に道路舗装部であるアスファルトと砕石層（60cm程度）を機械により掘削し、遺構を確認し、その場で埋め戻しを行う。一連の遺構の確認を先行した後、遺構が確認できた部分のみ発掘調査を行う。

調査は、下水道工事設計図に従い地山層まで掘り下げ、遺構及び遺物の検出に努める。

- 1) 測量（実測）は、遺り方と平板測量を併用する。
- 2) 遺構略称は、従来までの調査と整合性を持たせるため、国立奈良文化財研究所方式をとる。  
例 掘建柱建物跡・SB、溝跡・SD
- 3) 遺物略称は、従来までの調査と整合性を持たせるため、浪岡城跡発掘調査方式をとる。

例 陶磁器・P、鉄製品・F

遺構については、時代・時期を問わず掘り下げを行う。遺構について平板実測及び写真撮影等を行い記録の保存に努める。遺物については、すべて取り上げるものとする。

#### 7. 調査報告書の作成

調査結果については、浪岡町文化財要Ⅳの中に「平成15年度 浪岡町上下水道工事に伴う発掘・立ち会い調査報告書」として掲載・刊行することで、成果を公表する。

## 第2章 調査経過（発掘調査日誌より抜粋）

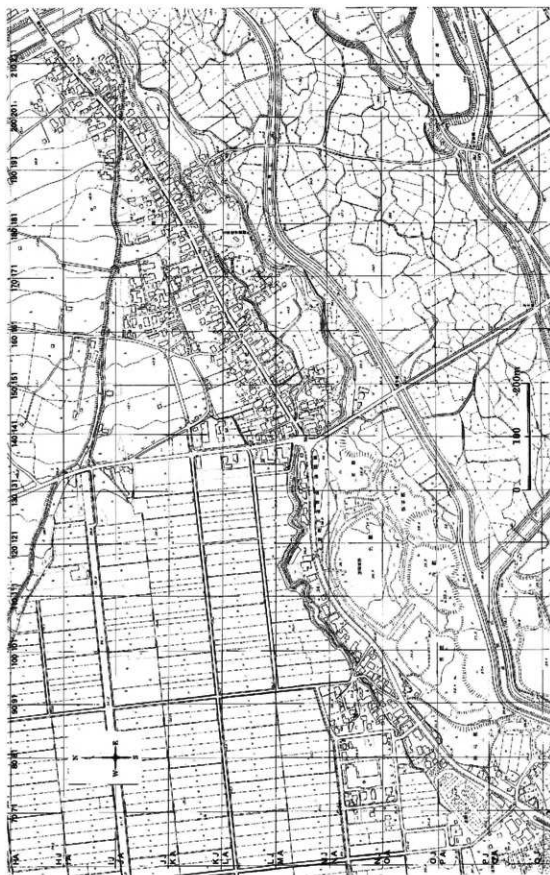
- 5月12日 浪岡城跡北館（標高36.99m）から仮標高の設置を行う。自動車学校の西側にBM1を設け、概ね50～70m間隔で設定した。浪岡一本松交差点の東側にBM18を設置。
- 5月13日 BM18から東へBMの移動、設置を行う。五本松コミュニティセンター以東にBM37を設置（岡本遺跡・羽黒平（1）遺跡の準備）。
- 5月19日 作業員採用面接試験実施。確認調査開始。浪岡一本松交差点から西へ。仮称浪岡城遺跡からPit01、SE01検出。Pit01完掘。SE01は中途にて掘り下げ中止。遺物なし。
- 5月20日 Pit02～05検出。完掘。遺物なし。
- 5月21日 Pit06検出、完掘。東館の西端付近でSH01～03検出。後日調査として埋戻し。
- 5月23日 Pit07・08検出。未掘にて埋戻し。SH04・05、SX02・03検出。
- 5月26日 SH05の西側壁確認。SH06検出。昭和60年の道路工事に伴う痕跡確認。
- 5月30日 検校館北側に至る。SH07検出。確認面で湧水あり。SI01、SX04～06検出。SX05（新）、SX06（旧）。覆土より遺物検出。
- 5月31日 SX06の西側を確認できず。Pit09検出。柱痕跡確認、完掘。SX07確認。
- 6月2日 自動車学校南側から工事起点（終点）まで確認終了。旧大豆取通りと伝えられる地点を横断しトレンチを入れたが、地山・旧大豆取通り検出できず。
- 6月10日 本日より本調査開始。SH01～03を調査。新たにPit10検出。完掘。SH01は中途（現地表土下100cm）にて掘り下げ中止。SH02は土坑の可能性もある。
- 6月11日 SH04とSX03・SH05を調査。SH04内よりPit11・12検出。Pit11は柱痕跡あり。SX03途中で掘り下げ中止。SH05は底面が水平に近く、近現代の遺構か。
- 6月12日 SH06調査。東側落ち込みは確認した。湧水著しい。西側は現代の工事で削平され確認不能。SH06内は3つの柱穴が重複し、連なる。
- 6月16日 自動車学校南側にて、SH07を3地点に分けて調査。東からa区、b区、c区。a区からは東側の落ち込み検出。b区覆土より越前甕、須窓器甕胴部破片。湧水極めて多い。c区より西側の落ち込み検出。鷺谷環の流路が改修され道路が造られた可能性がある。
- 6月17日 自動車学校南側。SI01、SX04～06と、SX07を検出。古代の堅穴館物跡をSI、中世の堅穴館物跡をSTと略称する。SI01は床面を検出できない。覆土より土師器。SX05・06は擾乱の可能性あり。SX07は現代の工事跡と思われる。
- 6月18日 無名の館（外郭）調査現場にて草刈り、調査区設定。浪岡城跡北館から水準移動設定する。表土（盛土層／I層）除去作業開始。
- 6月24日 無名の館盛土、旧表土（1～3層）除去。南北ベルトを設定し、東西にA、B区を設定（西をA）。平成2年の浪岡城跡史跡整備に伴う盛土のため、しまり極めて強い。
- 7月1日 無名の館掘り下げ・掃査。遺構覆土より青磁・染付出土。（仮称岡本遺跡内）太田一氏宅前にてSI06確認、南壁のみにかかる。平面観察不能。
- 7月2日 鷺谷環西側落ち込み検出。しかし、壁面でのみ確認。平面観察不能。SX20・21・22・23検出。SX23覆土より土師器杯・魚骨。遺構残りよし。SX21は東側に火床面の存在が見える（カマドなどの

焼施設?)。

- 7月3日 無名の館掘り下げ。遺物取り上げ。B区検出の擾乱(SX100)掘り下げ。A区にて柱穴検出。Pit100と命名。B区にて検出の柱穴はPit101とする。
- 7月9日 無名の館A区掘り下げ。灰層・腐植土層を面的に確認。加工木・箸取り上げ。北壁土層層序図作成。B区精査。A区からは湧水。A・B区から検出した堀跡をSH10とする。
- 7月15日 無名の館SH10完掘。湧水多量。写真撮影、平面実測。埋め戻し開始。
- 7月16日 無名の館埋め戻し完了。
- 7月18日 有馬正義氏宅前にて、SX01検出。平面形状不明。湧水量減る。
- 7月29日 新館墓所入門付近でSE02・03・04確認。中世の可能性あり。
- 7月30日 有馬武兼氏宅前にてSE05確認。単層か?
- 8月1日 太田岩一氏宅前にてSE06・07、SX03・04・05確認。SX05覆土より色変りの天目茶碗、南壁より鉄軸の天目茶碗出土。SX03は焼土塊があり、カマドなど燃焼施設が存在が考えられる。
- 8月5日 有馬正義氏宅前でSD01検出。
- 8月11日 太田英世氏宅前。SE08検出。覆土から美濃灰輪皿底部破片・染付皿口縁破片出土。SE08・09、SI02、Pit01、SX06検出。
- 8月18日 SE10検出。上部は擾乱されているようだが、下部は中世の井戸か? 遺物なし。南壁にはPit02。さらに遺構SI03とPit03、SE11検出。遺構東西範囲確定は翌日に持ち越し。遺物なし。SE11覆土上層(確認面)より白磁皿(16世紀)・覆土下層より白磁皿・土師器片など出土。
- 8月19日 苗代塚の旧落ち込み検出。しかし、南壁と北壁で様相異なる。羽黒平(1)遺跡に至る。マンホール地点にて、SX09遺構より肥前陶磁器出土。遺構上部は削平されていると考えられる。マンホール東壁にPit04。木村朋秀氏宅前にて、SI04とST01が重複して検出。SI(旧)、ST(新)。SIからはSIF04(カマド)検出。覆土及び袖内より土師器(坏・甕)片出土。SIは10世紀、STは無遺物ながら、中世の可能性あり。
- 8月20日 木村朋秀氏宅前にて、先日検出した堅穴遺構に対応する東側落ち込みを検出。遺構の北東隅より播鉢・肥前皿割部片・不明土製品(遺構覆土ではなく遺構上の褐色粘性土より出土の可能性あり)。更に南壁にPit05・06、北壁にST02(内部にPit07あり)、南壁にST03。一昨日検出したSI03の東側落ち込みを確認(但し、継続して検出していないため、SX09とした)。東西規模判明か。
- 8月21日 太田誠氏宅前にて、SX13・14・15・16、SE12検出。SEは覆土内に灰層・礫が見られる。中世の井戸か。上層擾乱土内から現代陶器片出土。
- 8月22日 佐藤民作氏宅への引き込み工区(本道より南へ)にて、Pit15・16検出。遺物・遺構面は確認できない。太田誠氏宅前にて、SI05検出。西壁に壁溝あり。SIのカマド(SIF05)は北向き、西半分までしか検出できなかったが(工事範囲内のみのため)、西壁から東西方向に1.3mまでは検出。燃焼部底面のもと思われる平坦な石(板状)も検出。厚さ3cm。燃焼部付近より遺物多く出土。土師器坏・甕、須恵器妻胴部など。上半部は以前の道路工事により削平されているため、天井部の構造などは不明。
- 8月25日 太田誠氏宅前にて先週検出のSI05・SIF05精査。遺物取り上げ。大半は本日まで崩落したようだ。その東側にてST04検出。覆土より青磁皿・苓引金・鉄釘・炭化材。内部よりPit08・09検出。

- 8月26日 地山の堆積状況に変化なし。昨日からの雨で湧水も見られる。午後、SXを1基（当初ST05とST06を一括してSXと認識）確認。覆土より銭貨（景德元寶）がひも付きの状態で見出。魚骨・不明鉄製品出土。
- 8月27日 太田定昭氏宅北西前より昨日検出のSXは、STが2基（ST05・06）重複していることを確認。ST05の北壁セクションより銭貨（大観通寶）、土師器片。北壁の東端でPit10。ST06は覆土より土師器片、染付皿・青磁碗胴部～底部、床面より鉄製品（刀子か？）出土。灰層が薄く2層あり、炭化物を極小粒～小粒状に20%含む。北東角よりPit11。STの東側よりSD03検出。断面は薬研状を呈し、底面は若干南側が低い（北側比2cmの標高底面差）。現地表より160cmドで底面を検出。覆土上部より加工木材？・不明鉄製品（角棒状）、中層より土師器甕底部出土。
- 8月28日 太田定昭氏宅前地山の堆積状況に変化なし。碎石下の旧舗装より現代磁器。午後、ST05覆土より銭貨（政和通寶）・青磁碗口縁部・染付出土。
- 9月1日 有馬秀美氏宅前にて、SX17・18・19検出。覆土に焼土を含むPit12。SX19と組み合わせてSIになる可能性もあるが、各々の新旧関係は不明。
- 9月3日 太田康博氏宅前にてSD04検出。南北溝。底面高低差なし。覆土のしまり強くロームブロック多い、遺物はないが近代以降の攪乱であると思われる。
- 9月9日 山田せつ氏宅前への引き込み工区にて、SX26検出。有馬治一氏宅への引き込み工区にて、SX07・08検出。立ち上がり木確認。有馬徳氏宅への引き込み工区にて、SX10・11検出。南側のSXは先日検出の遺構（SI04もしくはSX12）の北側となる可能性を持つ（SX12の方が可能性強か）。北側のSX10はNTT工事より旧。
- 9月10日 加茂神社前北側への引き込み、及び太田勇氏宅への引き込み立会い。遺構なし。以上、工事立会い分について終了した。
- 9月22日（仮称）岡本遺跡について、正式名称を岡本遺跡とすることを確認。東西範囲は西：浪岡一五本松交差点～東：蔭内商店西側の苗代塚とする。隣接して西側には浪岡城遺跡・東側には羽黒平(1)遺跡、南西側には史跡浪岡城跡（新館地区）と、遺跡が切れずに続く一帯となる。以後、浪岡町中世の館にて報告書作成のための整理作業に入る。
- SI 6基、ST 6基、SE12基、Pit16基、SX26基、SD 4基、SF 2基、計72遺構。

図2 本年度調査区グリッド配置図



### 第3章 検出遺構と出土遺物

#### 1. 浪岡城遺跡

浪岡城遺跡の調査は、史跡指定地隣接の道路敷きを調査した。調査区は、全長766m、幅1mの溝状になった。

また、調査区中ほどでSH01・02を検出したが、この箇所は北側を流れる鶯谷塚が最も南下する箇所である。また、史跡指定地内から見ても、無名の館に堀のラインが北側に不自然に入り込む部分である。無名の館と仮称する部分がかげられる形状を呈する理由として、SH01・02が浪岡城内の堀跡と関連を有するかを調査することとした。このため、上記の無名の館で北側に入り込む部分を2m×23mにわたり追加調査した。

なお、検出した遺構は、新設定の座標を基にしたグリッドで表記し、従来までの史跡浪岡城跡発掘調査時に使用した任意グリッドを( )書きとし付記した。また、従来の任意グリッド設定A区ラインから北に延びるグリッドについては、北方向に向かい小文字のa、b、c、dと送ることとした。(図3参照)

#### 1) 検出遺構

浪岡城遺跡発掘調査で、竪穴建物跡(SI)1棟、井戸跡(SE)1基、溝跡(SH)8条、柱穴跡(Pit)24基、性格不明遺構(SX)8基を検出した。

**竪穴建物跡** 竪穴建物跡と思われる遺構は1棟であり、PE-79区(G-11区)から検出した。

SI01(図4・8 写真2) 建物方向は、北東から南西に軸を有する200cm×50cm(確認面)×深さ18cm(確認面から)の規模となる。床面には貼床状のしまりは見られないため、土坑の可能性も考えられる。出土遺物は土師器の壺・坏、須恵器坏の口縁部破片が出土しており、掘り方と遺物からは古代の遺構と思われる。

**井戸跡** 井戸跡と思われる遺構はMH-137区(H-76区)から検出した1基のみである。

SE01(図8 写真2) この場所は交差点の中央部分であり再度の調査が困難であると思われるため、確認時に掘り下げを行った。確認面での規模は不明である。確認面から50cmまで掘り下げたが、南面の調査対象外へ広がるため、掘り下げを中止した。出土遺物はない。時期不明である。井戸跡と分類したが、直径が小さいため、浪岡城跡新館で検出している直径1~1.5m、深さ2m程度の性格不明遺構と報告(平成13年度浪岡町文化財紀要Ⅱ)したものに近いかもしれない。この一群は、門跡等の柱穴の可能性も考えられ、柱穴と井戸の中間程度の規模を有する比較的大きなPit状を呈するものである。

**溝跡(堀跡)** 溝跡は、何条か確認できたが、近代以降の道路工事に伴い重機等により掘削されたと思われる痕跡も多い。また、鶯谷塚の流路上に道路を拡張したと思われる部分も少なからずあるため、中・近世の溝(堀)跡と思われる遺構は少ない。

SH01(図7・8 写真3) MH-122区(B-62区)検出。東西方向に300cmの幅を持ち、深さは確認面から100cmを測った。出土遺物は、産地不詳の陶器片と珠洲製の播鉢(6)が出土している。SH10につながる溝とも考えられ、浪岡城跡並行期の中世に遡る遺構と考えられる。

SH02(図7・8 写真3) MH-122区(B-61・62区)検出。東西方向に80cmの幅を有し、確認面から



図3 史跡浪岡城跡新旧グリッド対照図(図中の●は検出遺構位置)

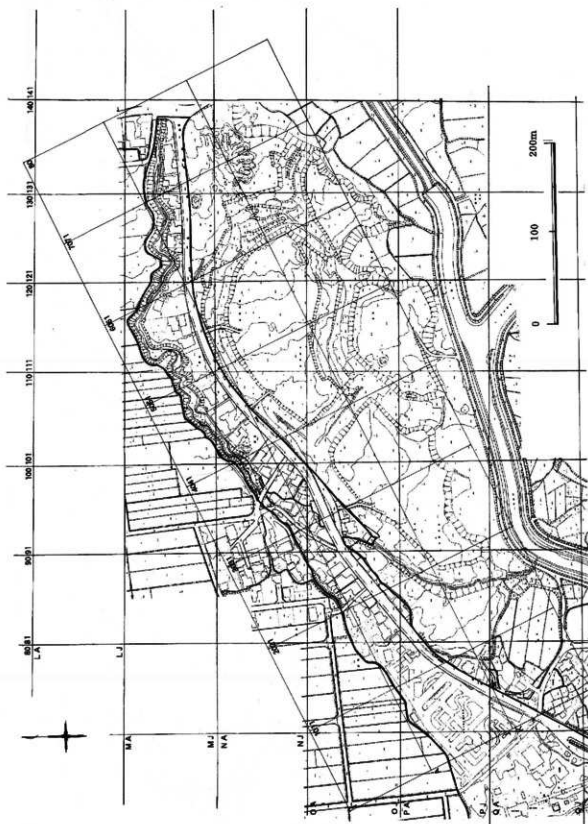
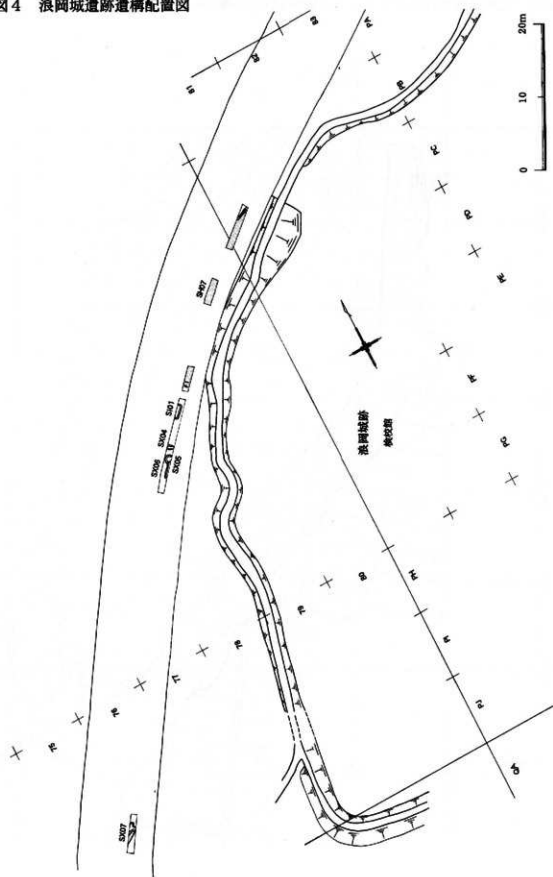


图4 淡阴城遗址平面配置图



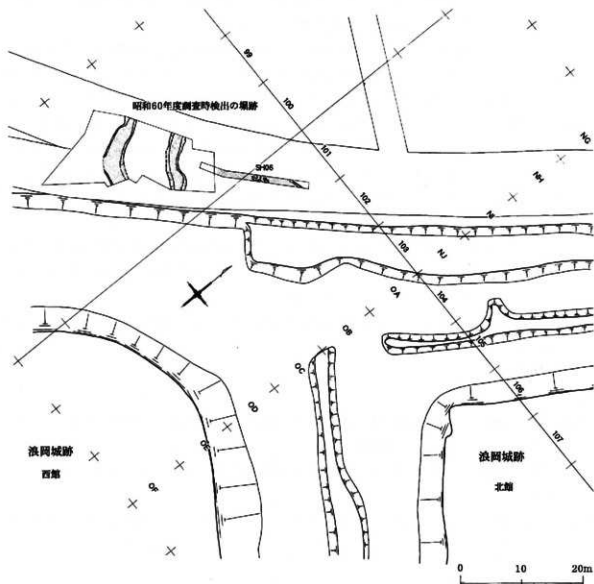
30cmの深さを測った。出土遺物は、瀬戸美濃灰軸折縁皿（8）が出土している。SH01と同様に中世の遺構と考えられる。トレンチ状調査のため、SH01とは別遺構としたが、延長と考えられるSH10の規模から推量すると同一遺構かもしれない。ただし、調査時に遺構の重複関係はつかめなかった。

SH03（図8） MH-121区（B-61区）検出。東西幅150cm程で、確認面から底までの深さは30cmを測る。遺構覆土は道路路盤と同様の碎石が充填されているため、道路舗装工事時の重機等による掘削痕と思われる。出土遺物なし。

SH04（図6・8 写真3） NA-110区（a-49区）で検出。東西幅240cm、確認面からの深さ20cm程度の溝で、底面からPit11、Pit12を検出した。出土遺物なし。時期不明。

SH05（図6・8 写真3） NE-105区、NF-104・105区、NG-103・104区（A-42・43・44、B-41・42区）で検出。東西幅900cm、SH01・02よりも遺構軸方向が東西に傾く。確認時に東端が認められたが、南側の遺構断面からは西側立ち上がりは判断できなかった。溝の深さについては、遺構検出箇所がNTT光ファイバーケーブルの埋設部分に近く、湧水も多量であることから、掘削によりケーブルを断線しかねないと判断し、掘り下げを途中で中止した。出土遺物は、青磁皿高台部（1）、不明陶器、土師器坏（10）・甕がある。

図5 浪岡城遺跡遺構配置図



砕石直下の確認面からは、ガラス製品の破片も検出しており道路舗装工事に伴うものと考えられる。

SH06 (図5・9 写真4) NJ-100区、OA-99・100区 (C-35・36・37区) で検出した。東西幅1430cm、深さ50～60cmの遺構で、1985年の道路付け替え工事に伴う調査時の「SD01・02」に対応する溝跡かもしれない。遺構内の覆土は、砕石に置き換わる形となっており、出土遺物は、埋め戻し時に混入したと思われる肥前陶器 (茶付碗・9) 1点と現代磁器・土師器甕胴部・坏が数点認められた。

SH07 (図4・9 写真4) PC-80・81、PD-79・80、PE-79区 (G-12、F-12・13・14区) で検出。東西幅310cm、深さ30cm以上の規模で検出した。検校館の北側を流れていた鶯谷堰流路を埋め立てて道路にしていることが推測されるものである。出土遺物は、土師器甕 (11・12・13・14)・坏、須恵器甕、瀬戸美濃鉄釉碗、越前系播鉢 (7)、現代陶器 (鉢) が検出された。これらの遺物が堰の利用年代に対応したものとは考えられない。堰は随時掘り直しを行っていたと考えられ、造路基盤である砕石直下の砂利層から昭和54年の製造年がついた食品のビニール袋が検出されている。

SH10 (図7・10・11 写真4) MI-121・122区 (B-60・61、C-61・62、D-62区) で検出。無名の館内で検出した堀跡。北東から南西幅が上面で約1000cm、底面で440cm、深さは整備前の旧表土 (2層) から195cmを測る。SH01・02の南側延長の可能性が高い。東側の斜面 (落ち際) は、再度構築した可能性もある層 (20・21・22層) により段状の形態を呈する。西側は近代以降の擾乱 (1層) により大きく地山が掘削されており、底からの立ち上がりもかろうじて確認できた程度である。

下層では、細砂と腐食土層が互層状に堆積することから、SH10の存続期間中に水の流れた状態と止水状態が交互に見られたことが推測される。SH01・02とSH10底面の標高を比較すると、SH10が低位にあることから、水流の方向はSH01・02からSH10を経て浪岡城内の堀へ (北から南へ) の方向が考慮される。しかし、鶯谷堰からの取水に利用した堀・用水堰と理解するためには、鶯谷堰の水位がさらに低いため、鶯谷堰に水留め等の大規模な施設を設ける必要がある。また、SH01・02の底面がSH01及び鶯谷堰よりも高く、多量の水が動いて削れた痕跡が認められない。このことから、取水のための堀とは考えにくく、無名の館を区画する施設とも考えることができる。いずれにせよSH10が中世の施設であると仮定するならば、城館期には鶯谷堰と堀跡とを繋げる区画溝状の景観が考えられ、館の一部を分断していたことが推測できる。

なお、十層からは大きく3時期の変遷が考えられる。2、3層までは現代の擾乱・利用層であり4層から9層までが最終末期の堀として機能していた部分である。幅広く、浅い堀の姿となる。その前段階として10、11層があり、最も古い時期として12層から15層までがある。

ただし、17層から19層と20層から22層までが東側の段を構成しているが、いずれの時期に伴うものかは不明であった。

#### 柱穴

Pit01 (図12 写真5) MH-138区 (H-76区) 検出。確認時は円形の直径70cm、残存深35cmを測る柱穴で、底部は40cmの方形を早する。出土遺物なし。

Pit02 (図12 写真5) MH-135区 (G-74区) 検出。楕円形で、16cm×20cm、深さ8.3cmが確認できた。出土遺物なし。

Pit03 (図12 写真5) MH-134区 (F-73区) 検出。楕円形で、16cm×20cm、深さ4cm程度が確認できた。出土遺物なし。

图6 洛阳城遗址平面示意图

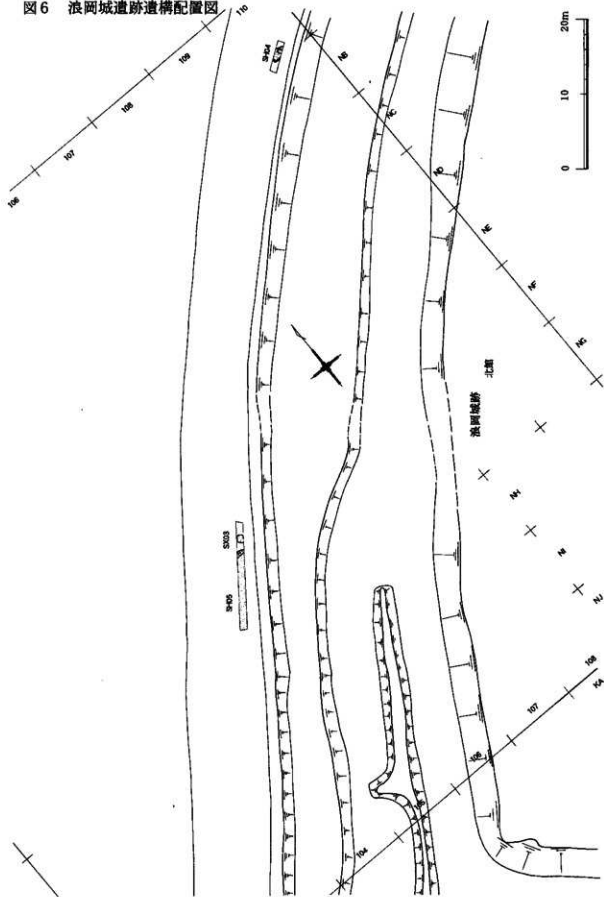


图7 淡马城遗址遗构配置图

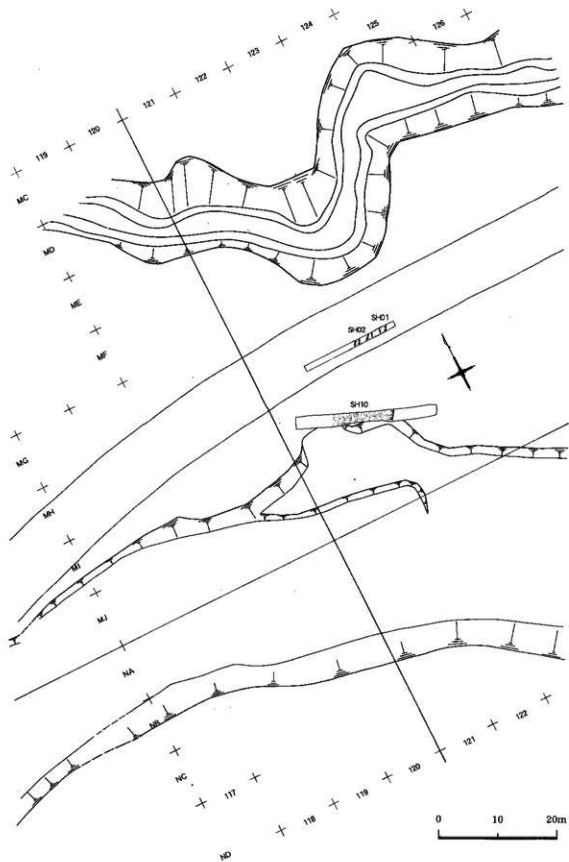


图8 遺構平面・層序実測図

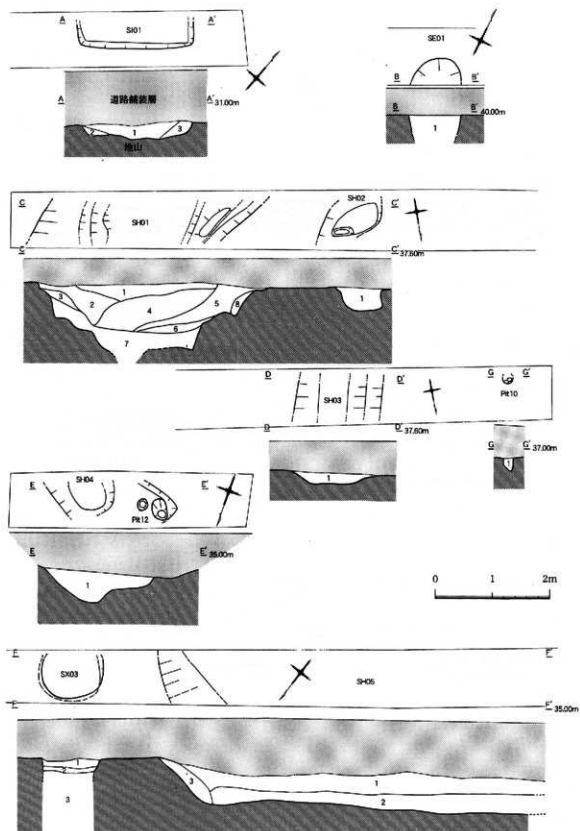
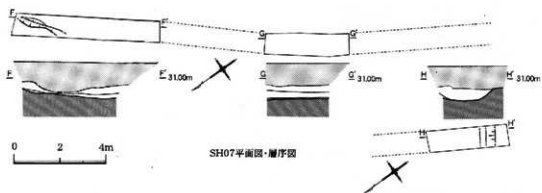
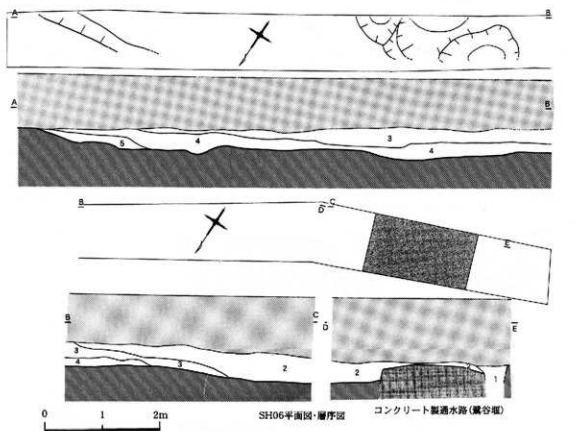


図9 遺構平面・層序実測図





Pit04 (図12 写真5) MI1-133区 (F-72区) 検出。確認できた直径は60cm程度で円形を呈すると思われる。深さは25.3cm、底径は推定40cm程度の柱穴となる。出土遺物なし。

Pit05 (図12 写真5) MH-130区 (E-69区) 検出。楕円形で、22cm×18cm、深さ1cm程度が確認できた。出土遺物なし。

Pit06 (図12 写真5) MH-125区 (C-65区) 検出。10cm×12cmの楕円形を呈し、深さ23cmを測る。出土遺物なし。

Pit07 (図12 写真5) MJ-112区 (a-51区) 検出。一辺36cmの方形を呈すると思われるが、確認のみであるため詳細不明である。

Pit08 (図12 写真5) NA-111区 (a-51区) 検出。東西幅26cmの不整形を呈すると思われる。確認のみであるため詳細不明。

Pit09 (図12 写真6) PI-76区 (I-7区) 検出。直径20cmの円形で、深さ7cmを測る。出土遺物なし。

Pit10 (図8 写真6) MH-121区 (B-61区) 検出。直径15cmの円形で深さ3cmを測る。出土遺物なし。

Pit11 NA-110区 (a-50区) のSH04底面にて検出した。東西幅25cm×南北35cmの楕円形で、SH04底面と柱穴底面がほぼ同一レベルの掘り方となるため、深さは判断できなかつた。出土遺物なし。

Pit12 (図8) NA-110区 (a-50区) のSH04底面にて検出した。一辺17cmの方形を呈し、深さ6cmを測る。出土遺物なし。

Pit13 (図10) MI-123区 (C-62区) で検出。SH10付近での検出。長径28cm、短径22cmの楕円形に近い不整形を呈し、深さは12cmを測る。出土遺物なし。

Pit14 (図10) MI-123区 (C-62区) で検出。Pit13同様にSH10付近での検出。長径25cm、短径23cmのほぼ円形を呈し、深さは32cmを測る。出土遺物なし。

#### 性格不明遺構

SX01・SX02 道路工事による擾乱。

SX03 (図8 写真6) NE-105区 (A-44区) で検出。直径100cm程の円形を呈するが、掘り方が円形で壁が機械的に切られた印象が強く、電柱等の埋設痕とも考えられる。30cm掘り下げた状態で調査を終了した。出土遺物なし。

SX04 (図12 写真6) PE-79区 (G-11区) 検出。東西幅50cm、深さ10cm程の溝状の遺構。上師器甕が1点出土しているが、覆土に大きなロームブロック・黄褐色砂質土ブロックが多く混入することなどから、近・現代の(道路工事に伴う)擾乱とも思われる。

SX05 (図12 写真6) PE-78区 (G-11区) 検出。遺構北側を検出した状態で、確認した規模は東西幅110cm、南北60cmとなる。深さは16cmを測り、土坑状を呈している。西側でSX06(旧)と重複している。出土遺物なし。覆土は、SX04に酷似しており、近・現代の擾乱である可能性が高い。

SX06 (図12 写真6) PE-78区 (G-11区) 検出。遺構北側を検出した状態で、東西幅210cm、南北10cmほどの直線状に遺構を確認した。深さ10cmほどであり、検出状況からは、堅穴建物跡の可能性も考慮できる遺構である。遺構東側でSX05(新)と重複している。出土遺物はない。SX05同様に、覆土がSX04に酷似しており、近・現代の擾乱である可能性が高い。

SX07 (図12 写真6) PJ-76区 (I-6区) 検出。東西幅350cmで深さ5cm程であるが、遺構覆土中から

图10 遺構平面・層序実測図

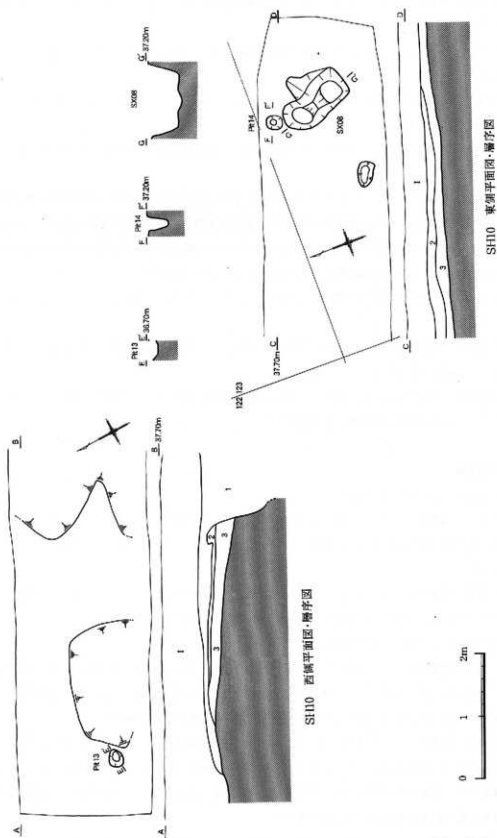
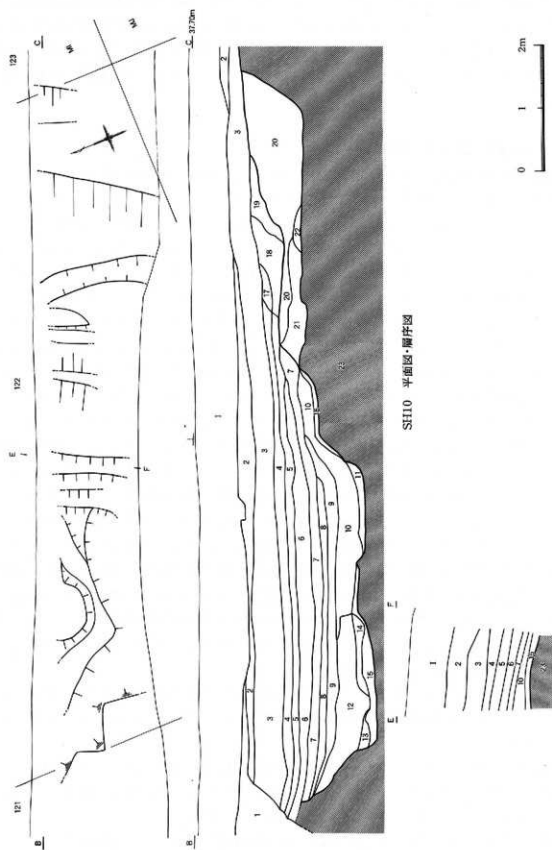


图11 遺構平面図・層序図



ガラス片やゴム、金属片、ビニール等が出上していることから、現代の擾乱と思われる。

SX08 (図10 写真6) MI-121・122区 (D-62区) 検出。SH10の西側で検出された遺構。東西幅85cm、南北幅116cm、深さ60cmで、柱穴が2基連なる形状を呈する。確認時にはビニールやガラス片が混入していたため、現代の擾乱として掘り下げた。しかし、現代の遺物の混入は確認面のみで、下層には灰及び炭化物粒を含む暗褐色土であった。柱穴としては時代が上るものであったかもしれない。出土遺物なく時期も不明である。

## 2) 出土遺物 (図13、14 写真15)

**陶磁器** 青磁碗・皿、染付皿及び国産陶器の瀬戸美濃碗・皿、珠洲播鉢、越前播鉢・甕が出上している。点数は9点しかなく、浪岡域に隣接する部分としては極めて少ない。

青磁皿高台部 (1) はSH05から出土し、高台内の中心部が露胎となるのみで、全面に青緑色釉が薄く均一にかかる。青磁皿 (2) はSH10から出土した破片で、見込み部分と思われる。内面に陽刻による花卉文状の文様が施され、内外面に深緑色の釉が均一にかかる。青磁碗胴部下半片 (3) はSH10東側から出土したもので、外面に便化進介の線条が刻まれている。内面にも印刻の文様が見られるが、モチーフは不明である。内外面ともに青緑色釉が薄く均一にかかる。染付皿 (4) はSH10の東側から検出したもので、高台の一部である。小片であるため、文様・全形・分量は把握できないが、見込み内は、花卉文と同線2条、外面は、アラベスクかと思われる文様が胴部に、高台に3条の回線が巡る。産地不詳甕 (5) SH10から出土した甕で、外面が褐色、内面は黄褐色を呈する。長石の吹き出しが内外面とも認められ、堅硬でぬめりのある胎土となっている。産地は不詳であるが、越前の可能性もある。珠洲播鉢胴部から底部の破片 (6) はSH01から出土したもので、内面に卸目が斜交し、底部にかかる破片であるため器厚2cmほど厚くなっている。越前播鉢胴部 (7) はSH07から出土したもので、1単位 (おそらく7条) の櫛目が見られる。櫛目の下方は使用により磨耗しており、使用の頻度が伺える。胎土には3mm以下の白色砂粒が含まれるが全体に軟質な印象を受ける。瀬戸美濃灰釉皿胴部破片 (8) はSH02から出土したもので、白濁が部分的に見られる灰釉が施された皿の胴部下半破片である。口縁形態は不明であるが、内面に鬘状の削りが認められ、口縁部がくの字型に外反する様相を呈することから、大窯のいわゆる第4段階内に含まれる折縁皿と思われる。このほか、瀬戸美濃褐釉大日茶碗胴部破片がSH07から出土した。口縁に近い胴部破片であり、内外面ともに鉄釉が薄くかかり、表面は鶯谷塚の水流で洗われたのか磨耗しており微細な擦痕が顕著である。城館期以降の遺物として、肥前磁器 (9) は碗の高台から底部の破片で内面は無文、胴部外面には草花文状の施文と、胴最下部に回線が1条、高台に2条の回線が巡り高台内にも文字状の施文が見られる。

**土師器** 内面黒色の坏 (10) とロクロ目の残る坏の口縁部・底部、甕の口縁部・胴部の小片が検出された。しかし、いずれも出土状況は確認作業及び遺構覆土上層からの検出であり遺構の時期を決定する資料とはなり得なかった。

**須恵器** 坏口縁部片・外面に叩き目のある甕胴部片 (11・12・13・14) を検出した。いずれも遺構覆土から。鉄製品 残存部4cmの角釘 (15) で、先端部分が欠損している1点のみ。確認調査時に遺構確認面 (前平の最下層面) において検出した。全く遺構に伴わないため、時期も不明。

**石製品** 白や鉄等の用途が考えられる加工石製品 (16) をSH10覆土より検出した。自然面を残すが、彫り窪められた面は加工痕が残り、中央部に近い部分には著しく摩滅した痕跡もある。割れた後、火を受けている

图12 遺構平面図・層序図

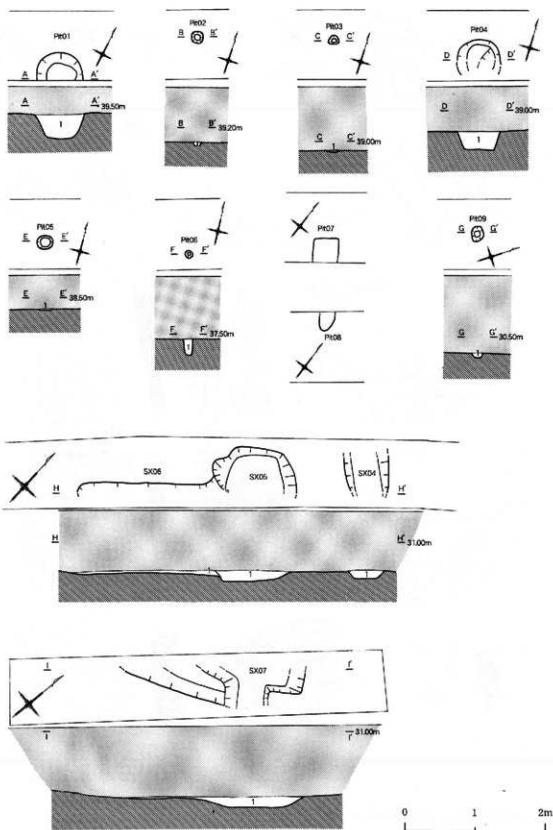


图13 波岡城遺跡出土陶磁器等実測図

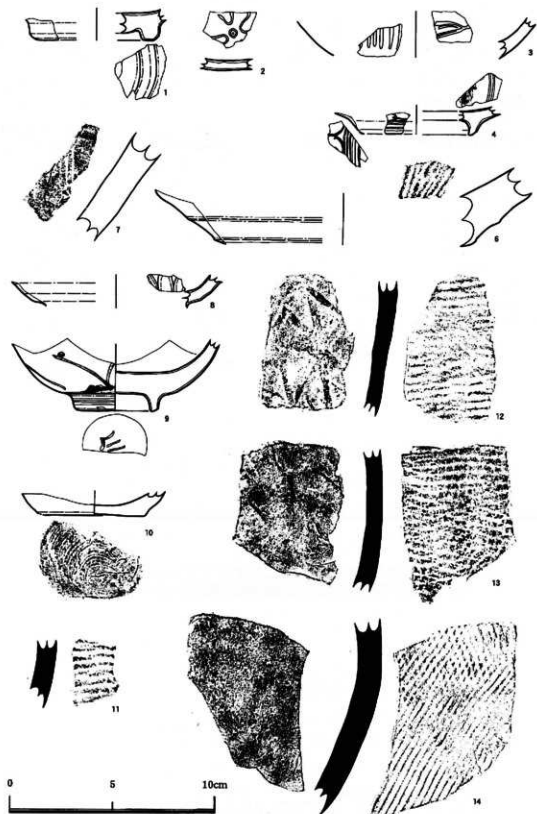
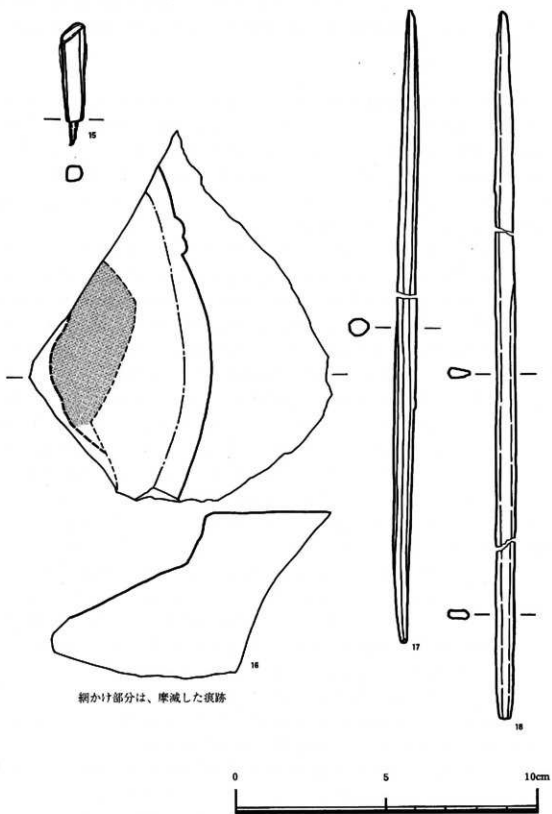


図14 浪岡城遺跡出土遺物実測図



網かけ部分は、摩滅した痕跡



と思われ、表面が黒色化している。

**木製品** 木製品はいずれもSH10覆土下層の腐植土中より検出した。箸(17)は長さ20.8cmで、7面の面取りを施している。また、箸に類似しており、断面が扁平な三角形を呈する加工木製品(18)は、長さ23.3cm、厚さ0.3～0.4cmである。これらの他に、梳状の加工材が出土しているが、用途・全体形状は不明である。

### 3) まとめ

発掘調査を行う以前は、浪岡城遺跡が史跡浪岡城跡の「郭をなす「無名の館」の部分であることから、かなりの遺構・遺物の検出を期待した。しかし、調査を行ってみると遺構数は少なく、遺物も少量を数えるのみであった。また、中世城館である浪岡城跡と同時期の遺構として確証を持てるものはなかったが、出土遺物および位置関係からはSH10・02・03が浪岡城跡の堀跡と鷲谷堀を結ぶ堀(溝)跡の可能性が高いと思われる。ともあれ、従来大豆坂通りとされてきた道路の下から、複数の遺構が検出されたことは、中世段階での大豆坂通りの位置を考える上で貴重な発見であった。

浪岡城跡研究で、大豆坂通りと認知されてきたのは、浪岡八幡宮の東から浪岡川へと南下し、検校館と西館の間を北上して現在の道路に合流後東へと直線的に延びてゆく堀底道(実際は中土塁上の道)であった。この道を尊重すると、調査時に浪岡八幡宮から浪岡川へと向かう道を横断する断面が確認できるはずだった。しかし、実際には水性堆積状の土砂しかなく、道を想定できる土層は全く確認できなかった。また、前述の旧大豆坂通りと現在の道路との合流地点でも湧水が著しく、道路状の遺構及び土層を確認することができなかった。

これらのことから、旧大豆坂通りについては、浪岡城内を通過する今までの説だけでなく、道路が浪岡城を迂回するルートも考える必要があることを再認識した。図24は、大正元年および大正5年に測量した地図であるが、この西地区には八幡宮から浪岡城跡を北へ迂回する道路が描かれている。大正元年の地図では、北側道路が浪岡川へ南下する道路よりも幅広い表現であるが、大正5年の地図では道路幅が逆転している。大正の初期で道路の優先順位が変わってきたことが推定できる。この北側道路が本来の大豆坂通りであった可能性がより高いものであろう。道路の優先順位の変更は、皇国主義の中で浪岡北畠氏の復讐と、浪岡城跡を同指定史跡へと推す動き、さらに、内館を大正天皇の御大典記念公園として整備するための道路の建設と無関係に思えない。

大豆坂通りの位置に関する問題以外にも、浪岡城に由来すると思われる中世の遺構と浪岡城以前の古代の遺構とが混在して検出されたことから、史跡浪岡城跡内と同様、古代の集落跡上に中世城館を構築していることが確認できた。史跡隣接地である今回の調査区を、今後、周知の埋蔵文化財包蔵地として登録することで、発掘調査の進展と遺跡の保護を図る必要がある。また、将来、史跡の範囲を確定し浪岡城跡の全体像を描く上でも、今回の大豆坂通りの位置について再考することは、意味深いものがあった。

いずれにせよ、本調査区は主要地方道路として整備されてきた経緯からか、ほぼ全面に渡り深さ約60cm前後まで掘削され、主だった遺構が破壊されていた可能性が高いこと、また、極めて狭窄なトレンチ調査であったことを勘案しても、数基とはいえ遺構が確認できたことは特筆に値する。

しかし、一方で後述する岡本遺跡の遺構の検出状況とあわせて考えた場合、史跡の隣接地(一部)とはいえ、遺構の敷、特に井戸跡等の深さのある遺構が極めて少ないことから、外郭(無名の館)と称してきた曲輪は他の曲輪と機能・使用状況の差異を考慮する必要が多大にあることを再確認させられた。



遺構名	層序	土層注記
SI01	1層	黒色土(7.5YR2/1)に、赤褐色砂質土(5YR4/8)を極小～小粒状に3%、炭化物を小粒状に2%、直径5～50mmの礫を2%含む。
	2層	黒色土(10YR2/1)に、にぶい黄褐色砂質土(10YR6/3)を極小～大粒状に2%含む。赤褐色砂質土(5YR4/8)を小粒状に1%含む。
	3層	黒褐色土(10YR2/2)に、にぶい黄褐色シルト(10YR6/4)を大粒～中粒状に5%、炭化物を極小粒状に3%、黒色土(10YR2/1)を厚い板状に5%含む。

遺構名	層序	土層注記
SE01		黒褐色土(10YR2/3)に、橙色焼土(5YR6/8)を1%、炭化物を10%、直径3mm以下の礫を2%含む混層。

遺構名	層序	土層注記
SH01	1層	黒褐色土(10YR3/2)に、灰黄褐色砂(10YR4/2)を、薄い～ごく厚い板状に30%、炭化物を小粒状に3%含む。鉄分の沈着が見られる。
	2層	黒褐色土(10YR3/2)(注:1層と同数値だが、1層よりはやや薄いベージュ色である)に、灰黄褐色砂(10YR4/2)を、中～ごく厚い板状に10%含む。鉄分の沈着多し。
	3層	暗褐色砂質土(10YR3/3)に、炭化物を小粒状に3%、明黄褐色砂質土(10YR6/8)を小粒状に3%、直径2mm以下の砂を15%含む。
	4層	黒褐色砂(10YR3/1)に、直径5～30mmの砂礫を50%含む。鉄分の沈着が極めて多く、赤褐色(2.5YR3/6)を呈する。
	5層	黒褐色砂(10YR3/1)に、直径5mm以下の砂礫を5%含む。
	6層	黒褐色砂(10YR3/1)に、直径5～30mm以下の砂礫を40%含む。
	7層	褐色砂(10YR4/4)に、明黄褐色砂質土(10YR6/8)を大塊状に3%、炭化物を小粒状に2%含む。
	8層	褐色砂(10YR4/4)と灰黄褐色砂(10YR4/2)の5:5の混層。明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に1%含む。

遺構名	層序	土層注記
SI102		黒褐色土(10YR2/2)に、黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小～小粒状に3%、礫を大～極大塊状に3%、炭化物を小粒状に1%含む。下層につれて礫多く、しまり強し。

遺構名	層序	土層注記
SI104		黒褐色土(10YR3/2)に、明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に5%、にぶい黄褐色パミス(10YR7/2)を極小粒～小粒状に3%、明黄褐色焼土(5YR5/8)を極小粒状に1%、炭化物を極小粒状に1%含む。

遺構名	層序	土層注記
SH05	1層	黒色土(10YR2/1)と、にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)と黄褐色砂質土(10YR5/8)が3:2:1の混層に、炭化物を極小粒状に3%含む混層。しまり強い。
	2層	褐灰色粘性土(10YR4/1)。しまり弱い。
	3層	黒褐色土(10YR3/2)に、暗褐色砂質土(10YR3/3)を大粒状に7%、炭化物を極小粒～小粒状に5%含む混層。

遺構名	層序	土層注記
SH06	1層	黒褐色土(10YR3/1)に、直径5~10mmの砂礫を7%、にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)をごく厚い層状に7%含む混層。
	2層	灰黄褐色砂(10YR4/2)に、にぶい黄褐色土(5YR4/4)を小~大塊状に10%含む。
	3層	黒褐色砂(10YR3/1)に、黄褐色砂質土(10YR4/4)を極小粒~中粒状に5%、炭化物を極小粒状に2%含む。
	4層	暗褐色砂(7.5YR3/3)に、黒褐色土(10YR2/2)を小塊状に3%、炭化物を極小粒状に5%含む。

遺構名	層序	土層注記
SH07	1層	にぶい黄褐色砂(10YR4/3)に、黒色砂(N1.5/0)を薄い層状に10%、赤褐色砂(5YR4/8)を厚い板状に3%含む。
	2層	黒褐色土(7.5YR3/1)に、明褐色砂質土(7.5YR5/6)を極小粒状に3%含む。
	3層	5~50mmの礫を主体とし、礫間になぶい黄褐色砂(10YR4/3)と黒色砂(N1.5/0)を互層状に含む。礫：にぶい黄褐色砂：黒色砂=7:1.5:1.5。
	4層	褐色砂(10YR4/4)の単層。
	5層	黒色粘土層が4cmの厚さで堆積する。腐食十層(10YR1.7/1)。木の葉・根・初級などの植物遺体で構成される。(b区：中央区でのみ検出)

遺構名	層序	土層注記
SH10	1層	平成2年度の史跡整備盛土。1層に芝を貼った黒色土(=表土)、中層になぶい黄褐色土(10YR5/3)、下層にしまり強の褐色粘性土(7.5YR6/6)が見られる。
	1層	覆乱。褐色土に、ガラス・ビニール・ゴム・土管・輪軸などが多数混入。現代(昭和)のものか。
	2層	黒褐色土(7.5YR3/2)。ビニール・ガラス・缶などごみが多数混入。殆どごみ捨て場状態となる。発掘の際のごみを含む旧表土層か？現代磁器多数出土。
	3層	黒褐色土(10YR3/2)に、明褐色焼土(5YR5/8)を極小粒状に3%、炭化物を極小~小粒状に3%、直径10mm以下の礫を7%含む。ごみ(ビニール袋・洗器)など若干混入。炭片・現代磁器・磁器等出土。
	4層	黒褐色土(10YR2/2)に、明赤褐色焼土(5YR5/8)を極小粒状に2%、にぶい黄褐色パミス(10YR6/3)を極小粒状に1%、炭化物を極小粒状に1%含む。
	5層	黒褐色土(7.5YR2/2)に、明褐色砂質土(7.5YR5/6)を極小粒状に15%、明黄褐色シルト(10YR7/6)を極小粒状に5%、炭化物を極小粒状に1%含む。
	6層	黒褐色土(10YR2/2)に、明赤褐色焼土(5YR5/8)を極小粒状に3%、にぶい黄褐色パミス(10YR6/3)を極小粒状に5%、炭化物を極小粒状に1%含む。
	7層	黒褐色砂質土(10YR3/2)明褐色粘性土(7.5YR5/6)を小塊~中塊状に10%、明黄褐色砂質土(10YR7/6)を極小粒~細大粒状に7%、明赤褐色焼土(5YR5/8)を極小粒状に3%含む。部分的に互層状に堆積する。土師器・石製品出土。
	8層	黒色土(7.5YR2/1)に、黒色灰(N2/6)を中くらいの板状に15%含む。
	9層	黒褐色砂(10YR3/2)に、褐色粘性土(7.5YR4/6)を小塊状に3%、暗赤褐色砂(5YR3/6)を中塊状~大塊状に7%含む。鉄分が沈着する。土師器出土。
10層	黒色土(7.5YR1.7/1)に、褐色砂(7.5YR4/4)を大塊~厚い板状に10%、暗褐色粘土(10YR3/3)を中塊~大塊状に3%含む。植物遺体(木杭、切崩のあたる材などの加工木・くすみ)を多量に含む。湿性高、粘性中。	

11層	暗赤褐色砂 (5YR3/6) の単層。鉄分沈着者しい。
12層	黒褐色砂 (10YR3/2) に、暗赤褐色砂 (5YR3/6) を小塊～大塊状に15%、褐色粘性土 (10YR4/4) を大粒～大塊状に5%含む。鉄分多し。
13層	黒色粘性土 (10YR2/1) に、直径2～5mmの砂礫を5%含む。粘性強、しまり中。
14層	黒色土 (7.5YR1.7/1) に、褐色砂 (7.5YR4/4) を大塊～厚い板状に10%、暗褐色粘土 (10YR3/3) を中塊～大塊状に5%含む。植物遺体 (木枕、切崩痕のある材などの加工木・くすみ) を多量に含む。塑性高、粘性中。
15層	明黄褐色砂質土 (10YR6/6)。鉄分沈着多い。
16層	黒褐色土 (7.5YR3/1) に、明黄褐色砂質土 (10YR7/6) を極小粒状に3%、褐色細砂 (7.5YR4/6) を大塊状に5%含む。塑性高、粘性強。
17層	暗褐色土 (10YR3/4) に、直径3～15mmの礫を40%、黄褐色砂質土 (10YR5/8) を極小～中粒状に7%含む。SH10の崩壊土 (崩落土) か。青磁出土。
18層	黒褐色粘性土 (10YR3/2) に、にぶい黄褐色砂 (10YR5/4) を極小～小粒状に5%、H層状に含む。鉄分の沈着が多い。SH10の崩壊土 (崩落土) か。
19層	黒褐色粘性土 (10YR3/1) に、明黄褐色粘性土 (10YR6/8) を小～中粒状に2%、直径3～5mmの礫を3%含む。鉄分の沈着が多い。土師器要、層下部から越前? 甕出土。
20層	明黄褐色砂質土 (10YR6/8) に、灰黄褐色粘性土 (10YR5/2) を極小～小粒状に10%、黒褐色土 (10YR2/2) を大塊状に7%、灰色砂 (10Y4/1) を小粒状に5%、灰白色シルト (10YR8/1) を小～中粒状に3%、暗赤褐色粘性土 (5YR3/6) を極小～小粒状に2%、直径3～10mmの礫を7%含む。SH10の崩壊土 (崩落土) か。
21層	黒褐色砂質土 (10YR3/1) に、黒褐色粘性土 (10YR3/2) を極小粒状に10%、にぶい黄褐色砂質土 (10YR6/3) を極小粒状に10%、暗赤褐色粘性土 (5YR3/6) を極小粒状に10%、直径3～10mmの小礫を10%含む。SH10の崩壊土 (崩落土) か。
22層	にぶい黄褐色砂質土 (10YR6/3) と、にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) の5:5の混層。互層状に堆積する。SH10の崩壊土 (崩落土) か。
23層	地山 (灰白色砂質土: 2.5Y7/1)

遺構名	層序	土層注記
Pit01		黒褐色土 (10YR3/1) に、酸化鉄を多量に、白色粘土・炭化物を少量含む。

遺構名	層序	土層注記
Pit02		黒色土 (7.5YR2/1) に、黄褐色砂質土 (7.5YR7/8) を極小～小粒状に15%、炭化物を極小粒状に10%含む混層。

遺構名	層序	土層注記
Pit03		黒色土 (10YR2/1) に、黄褐色砂質土 (10YR5/6) を極小粒状に5%、5mm以下の砂礫を10%、炭化物を極小粒状に5%含む混層。

遺構名	層序	土層注記
Pit04		黒色土 (7.5YR1.7/1) に、にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) を極小粒～大塊状に15%、直径2mm以下の砂礫を15%、褐色灰 (10YR4/1) を小～大塊状に7%含む混層。

遺構名	層序	土層注記
Pit05		黒褐色土(10YR3/2)に、5mm以下の砂礫が15%、黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小粒～小粒状に3%含む。

遺構名	層序	土層注記
Pit06		黒褐色土(10YR2/2)に、明黄褐色土(10YR6/8)を極小粒状に2%、炭化物を小粒状に若干、5mm以下の小礫を1%含む。

遺構名	層序	土層注記
Pit09		黒褐色土(10YR2/2)に、黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小粒～中塊状に10%含む。

遺構名	層序	土層注記
Pit10		黒色土(10YR2/1)に、炭化物を極小粒～大粒状に15%、暗赤褐色焼土(5YR3/6)を極小粒～中粒状に5%、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を極小粒状に3%含む。

遺構名	層序	土層注記
Pit11 :Pit12		SH04の底面より検出したが、確認時には完掘状態であった。覆土はSH04と同一。

遺構名	層序	土層注記
Pit13		単層であるが、注記取らず掘り下げ。

遺構名	層序	土層注記
Pit14		極暗褐色土(7.5YR2/3)に、暗赤褐色焼土(5YR5/8)を極小粒状に2%、直径3～5mmの礫を20%含む混層。植物の根が多い。

遺構名	層序	土層注記
SX01		黒褐色土(10YR2/2)に、赤褐色土(2.5YR4/6)を極小粒状に7%、明褐色砂質土(7.5YR5/6)を極小～小粒状に3%、浅橙色パミス(10YR8/3)を極小粒状に3%含む混層。

遺構名	層序	土層注記
SX03	1層	黒褐色土(10YR2/2)に、にぶい黄褐色砂(10YR7/3)を小粒状に7%、炭化物を中～大粒状に5%、赤褐色土(10YR4/6)を中粒状に1%、直径5～10mm程度の砂礫を1%含む混層。
	2層	黒褐色土(10YR2/2)とにぶい黄褐色砂(10YR7/3)の5:5の混層。
	3層	黒色土(10YR2/1)に、炭化物を小粒～大粒状に7%含む混層。湿性・粘性有。

遺構名	層序	土層注記
SX04		黒色土 (7.5YR1.7/1) に、にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) を極小粒～大塊状に20%、極小粒状の炭化物を7%、赤褐色焼土 (2.5YR4/6) を極小粒状に2%、黒褐色粘性土 (10YR3/2) を大塊状に10%含む混層。

遺構名	層序	土層注記
SX05		黒色土 (7.5YR1.7/1) に、にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) を極小粒～大塊状に20%、極小粒状の炭化物を7%、赤褐色焼土 (2.5YR4/6) を極小粒状に2%、黒褐色粘性土 (10YR3/2) を大塊状に10%含む混層。

遺構名	層序	土層注記
SX06		黒褐色土 (7.5YR3/1) に、黒褐色粘性土 (10YR3/2) を5%、明黄褐色砂質土 (10YR7/6) を極小粒状に1%含む混層。

遺構名	層序	土層注記
SX07		黒色土 (10YR2/1) に、赤褐色焼土 (5YR4/6) を、極小粒～小粒状に2%含む。明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小粒状に1%含む。しまり弱 (柔らかい印象)。

遺構名	層序	土層注記
SX08		覆土2層。上層は焼乱土。下層 (底面直上) は灰泥の黒色粘性土。注記取らず割り下げ。

## 2. 岡本遺跡

### 1) 検出遺構

竪穴建物跡 (SI・ST) 12棟、井戸跡 (SE) 12基、溝跡 (SD) 4条、柱穴跡 (Pit) 14基、性格不明遺構 (SX) 26基を検出した。

**竪穴建物跡** 竪穴建物跡には、古代の建物跡と中世と思われる建物跡がある。古代の建物跡はSIとし、中世の建物跡をSTとして報告する。なお、古代の竪穴建物跡に伴うカマドはSIFとして建物跡の一部と捉えSI項目内で報告する。したがって、SI番号と、カマドのSIF番号は同一の番号を付すこととする。

SI01 (図18 写真7) LC-161・162区検出。東西幅300cm以上となると思われるが、北壁のみの確認であるため平面形は不明。現地表下70～90cmに底面を確認した。東側に壁溝。黒色土に、炭化物を小～中粒状に5%、焼土1%、礫を大粒～小塊状に5%含む覆土。土師器甕胴部出土。西側の広がりについて、掘削・埋め戻し時に立会いできず、結局東西幅などを確認することができなかった。古代の遺構か？

SI02 (Pit01) (図18 写真7) LC-161・162区検出。南・北壁にて遺構断面を検出した。東西幅120cm程度、南北幅140cm程度で、現地表から50～67cm下がったレベルで底面となる。SE07よりも旧。覆土は、少なくとも2層、上層：黒色土主体。下層：黄褐色砂質土。マンホール敷設工区西端で検出されたが、規模は工事作業の関係土把握できなかった。四方に伸びる可能性をもつ。遺物なし。

遺構に伴うと思われるPit01は直径20cm、底面は現地表下50～92cmで、残存状態は良く、柱穴には柱痕が残る。遺物なし。

SI03 (Pit03) (図18 写真7) LB-164・165区。東西幅300cm以上を南北壁にて検出したが、平面形は不明。現地表下30～64cmで底面確認した。SE11より新で、SX07と同一の遺構の可能性を残す。黒色土主体の覆土。遺構は、調査区に対して南東方向に軸がずれる印象を受ける。東側にてSX09を検出したが、SI03の東側落ち込みである可能性がある (埋戻されていたため、同定不能)。土師器甕、角釘 (42) が出土している。16世紀後半の遺物を出土したSE11より新しいため、16世紀後半以降であると考えられる。柱穴 (Pit03) を南壁にて検出。直径18cm。現地表下64～94cmで底面となる。

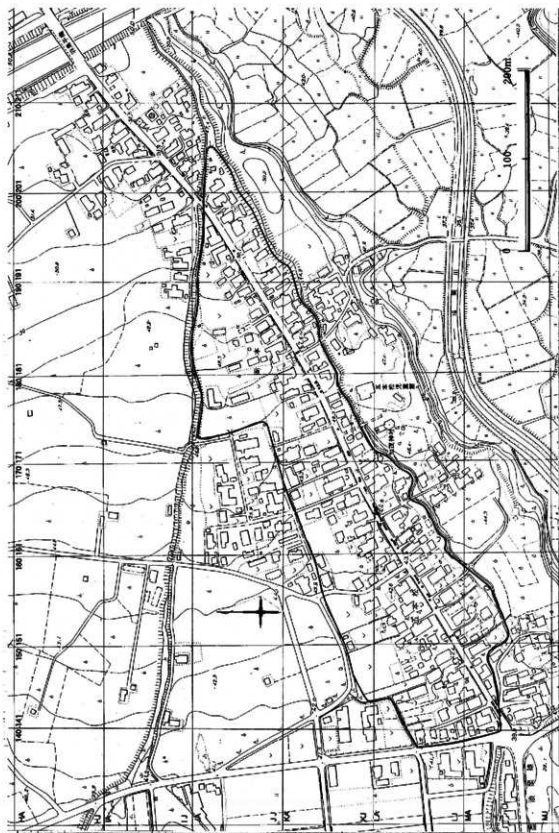
SI04 (SIF04) (図18 写真7) LA-166区検出。遺構は、北壁と平面で検出した。南北60cm以上、東西180cm、現地表土下40～60cm。平面は方形と思われる。ST01より旧。黒色土主体。上部は削平され、カマド上部構造などは不明。SIF04は南側袖部のみ検出。袖幅 (南北幅) 10cm、袖高 (残存部分) 15cm、袖長50cm (以上)、袖部より土師器杯・甕胴部・口縁部 (32)・鉢口縁部 (33・10世紀～11世紀) が出土、袖の心材として利用したものと思われる。

SI05 (SIF05) (図18 写真7) KJ-168区。南北壁と平面で方形の遺構を検出した。東西280cm、南北120cm、現地表土下40～70cm程度と思われる。覆土は焼土・炭化物を含む黒褐色土で、底面 (床面) は硬化している。

SIF05は北向きのカマドで、燃焼部・袖部より遺物を多数検出した。心材として活用したのか、焼けハジケ痕跡がある石材を検出した。須恵器杯 (39)、須恵器甕 (40・41)、土師器甕口縁部 (34)、土師器甕底部 (35・36) が出土している。

SI06 (図19 写真7) KD-179区から検出。東西幅330cm。東側のみ壁溝あり。残存深は壁溝部分が確認面から35cm、床部分が12～14cm。東側では現地表土下72cmにて検出。覆土は黒色土 (10YR2/1) に、明黄褐色砂

図15 岡本遺跡全体図・グリッド配置図(図中の●は検出遺構位置)



質土を小粒～大粒状に7%含む。遺物なし。

ST01 (図18 写真7) LA-166区で検出。南北幅70cm(以上)、東西幅120cm(以上)、現地表土下40～70cm。平面形は方形の可能性がある。南側は調査区外。S104より新。黒色土主体で炭化物を多く含む。覆土は3層以上に分層可能。東端は工事の関係上検出できなかったので規模は不明。遺物なし。

ST02 (Pit07) (図18 写真8) LA-166区の北壁にて検出。東西幅(検出面にて)167cm、(底面にて)158cm。南北幅認幅70cm。平面形は方形か。現地表土下47～112cm。覆土はほぼ均質な黒色砂質土であるが、遺構中央下部に厚さ1.2cmの灰層が板状に広がる。小礫・腐植土・灰を含む。立ち上がりがほぼ垂直で、掘り方がしっかりとしており、古代の遺構よりも覆土がより黒色に近いことなどから、中世の遺構とも考えられる。遺物なし。Pit07はST02の西側北壁にて検出。直径(東西幅)20cm、底面幅6cm、深さ26cm。

ST03 (図18 写真8) LA-166区の南壁にて検出。東西(遺構軸とは不一致)幅285cm、南北(遺構軸とは不一致)幅40cm。南側は調査区外。現地表土下30～69cm。方形か。黒色土主体の覆土より土師器莖、須恵器壺出土。東西の端に壁溝のような凹状箇所が見られる。底面は平坦ではなく、若干皿状に凹んでいる。

ST04 (Pit08・09) (図18 写真8) KJ-168・169区で検出。東西幅230cm、南北幅120cm(南北は調査区外)、現地表土下40～100cm、平面形は方形の可能性がある。覆土は2層に分かれ、炭化物層・灰層を含む(上層は灰を含むが、下層は灰を含まない)。北壁から炭化材を検出。掘り方はしっかりとしている。覆土より木質を残す苧引金(43)・青磁棧花皿胴部(19)・土師器、底面(床面)直上より角釘(44)。確認面(道路工事に伴う面)から現代磁器。中世の竪穴建物跡か。

Pit08 覆土ST04覆土と同じ。直径10cm、平面円形。残存深ST04底面より37cm。

Pit09 覆土ST04覆土と同じ。直径26cm、平面円形。残存深ST04底面より61cm。

ST05 (Pit10) (図18 写真8) KI-170区の北壁及び平面にて検出。東西幅180cm(推定)、南北幅120cm以上、現地表土下50～86cmの方形と思われる。ST06より新。上層は明るい黒褐色土、下層は黒色土に明黄褐色砂質土を小～大粒状に含む。いずれも、炭化物・炭化材・骨を含む。検出時には西側は削平を受けた後で、その際に覆土の一部が崩落、崩落土より銭貨(ひも付き・木質に包まれていた?銭貨を含む・49～55)検出。後日北壁より銭貨・染付牡丹唐草・玉取り獅子?皿口縁部～胴部(24)・青磁碗口縁部(20)、覆土より土師器・須恵器杯・挟り込みのある不明鉄製品が出土した。

Pit10 覆土は黒色土1層か?ST05の東端北壁にて。深さ底面(床面)より20cm。平面円形で直径15cmを測る。

ST06 (SD02、Pit11) (図19 写真8) KI-170区の南壁・平面にて方形と思われる遺構を確認。東西幅260cm、南北幅60cm以上、現地表土下50～100cm。ST05より旧。覆土は黒色土に、炭化物を小～中粒状に多量、灰層を薄く板状(5cm程度)に含む。魚骨を含む。覆土下層より砂鉄を検出。掘り方は垂直に落ち込み、しっかりとしている。床面の溝状の窪み(東西方向、幅5cm、深さ5cm弱)をSD02としたが、建物内部の施設に伴う痕跡であろうか。

覆土より青磁碗底部～高台部(21)、染付瑠璃文皿底部～高台部(25)、土師器片、須恵器大甕、床面より刀子の柄状の鉄製品(45)、確認面より針状の鉄製品出土。

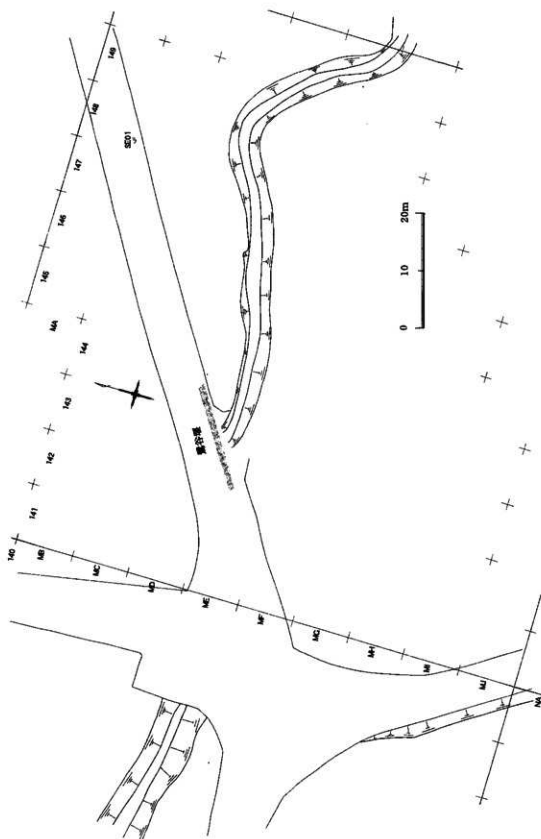
Pit11 直径15cm、平面円形。深さ底面より32cm。ST06北東隅より検出。

#### 井戸跡

SE01 (図16 写真9) MA-148区検出。東西幅100cm程度。残存深200cm。有馬進氏宅付近表土上下60cm北壁



图16 固本渣砂造構配置圖



地点にて検出。覆土黒色土、炭化物を大塊状に7%含む。覆土より不明鉄製品出土(46)。

SE02(図17 写真9) LG-156区の北壁にて検出。残存部からは直径180cm程度の規模を想定できそうである。表土下100~260cm程度までを確認。底面はさらに下になる。覆土は黒色土。近現代の擾乱を受けている。調査中に崩落したため詳細不明。出土遺物なし。

SE03(図17 写真9) LG-156区の南壁にて検出。表土下60~250cm(底面確認)。直径150cm。灰層・炭化物・焼けた魚骨を含む黒色土の覆土(分層可能)。底面付近より珠洲系赤銅部検出。調査中に崩落。掘り方はしっかりとしている。

SE04(図17 写真9) LG-156区の南壁にて検出。表土下60~260cm(底面確認)。直径90cm程度か?覆土はSE03とはほぼ同じ。SE03と同様、中世の遺構の可能性がある。出土遺物なし。

SE05(図17 写真9) LG-157・158区の北壁で検出。表土下60~260cmまで確認。東西幅80cm。炭化物を多量に含む黒色土で、単一層のように見えるため、一時に埋め戻した可能性を考えられそうである。出土遺物なし。

SE06(図17 写真9) LF-158区の南壁で検出。表土下60~260cmまで確認。東西幅110cm。炭化物を材状に、直径5cm程度の隙を含む黒色土。丸釘・土師器片出土。

SE07(図18 写真7) LC-162区南壁にて検出。東西幅73cm。現地表土下50~70cm(までは確認)。覆土は黒色土主体で遺物なし。掘削時に立会いできなかったため、規模不明。

SE08(図18 写真9) LC-163区北壁にて検出。直径80cm程度か?(残存東西幅60cm)。現地表土下42~70cm(埋め戻し面までの確認)。覆土は検出時には大部分が崩落していた。黒色土主体となる。掘り方はしっかりとしている。出土遺物なし。

SE09(図18 写真9) LB-164区北壁にて検出。東西幅80cm、現地表土下40~260cmは確認(掘り下げ中止レベル)。灰・焼土・炭化物・石を含む黒色土。分層可能。7層以上を確認したが崩落。覆土より美濃灰釉皿底部(31)、染付皿1口縁部(26)、土師器壺胴部。中世の井戸か。

SE10(図18 写真9) LB-164区北壁のみで検出。東西幅80cm。現地表土下90~220cmまでは確認。灰・炭化物を含む黒色土で分層は可能かと思われる。中世の井戸といった印象の、掘り方のしっかりとした遺構。底面は掘り下げ中止により検出できなかった。上部は擾乱を受けているため、残存深がやや浅い。覆土は擾乱されているが、掘り方(漏斗形に広がる)は当時の形態と思われる。出土遺物なし。

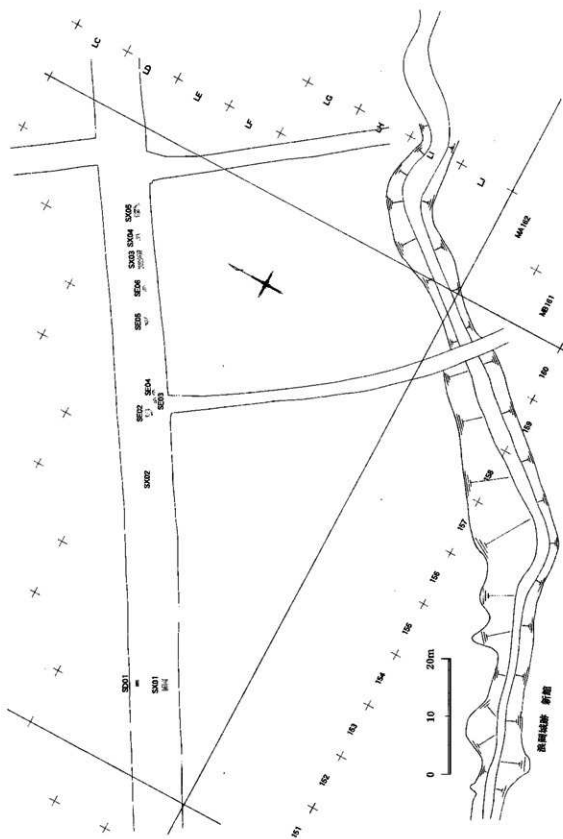
SE11(図18 写真10) LB-165区北壁にて検出。直径(南北)幅80cm、現地表土下64~260cm。平面円形。上から黒色土層・シラス混土層・灰層・黒色土層と大まかに4層に分層可能。炭化物・有機質遺物を含む。湿性極端が高い。掘り方・遺物から見ても中世の井戸と思われる。時期不明の柱穴を持つ遺構(SI03)に切られている。確認面(北壁覆土上部)より白磁皿高台部(23)・覆土下層より白磁碗反り皿口縁部(22)・土師器坏胴部、磁器。16世紀後半の遺構と思われる。

SE12(図12 写真12) LA-167区南壁のみで検出。直径90cm程度か?東西幅70cm。南壁への奥行き10cmほど、現地表土下47~280cm以上。魚骨を含む黒色土。中世の可能性も考えられるが時期は不明である。確認中に崩落。出土遺物なし。

#### 溝跡

旧鷺谷埋流路(図16 写真10) ME-142、MD-142・143区で検出。幅14m前後。湧水多量のため、層の

图17 西本遺跡遺構配置圖



観察困難。しかし、黒く粘性の高い腐植土が厚く堆積する様子が見られた。遺物は現代陶磁器・播鉢・伊万里碗・皿・あぶら行など。

SD01 (図17 写真10) LI-152区東壁・西壁。道路北側への引き込み工区にて検出。表上下60cm~190cm。幅60cm程度か? (底幅は10cm前後)、断面はU字形。黒褐色土に草根が若干混入する。出土遺物なし。比較的新しい時代に属する遺構と思われる。

SD03 (図18 写真10) KI-170区で検出。東西幅100cm、底面19cm、現地表土下50~210cm。断面築碁据状で、確認面から緩い角度で落ち込んだ後、ほぼ垂直に落ち込む。底面は平坦で北側現地表土下158cm、南側現地表土下160cmであるため、若干の高低差が見られる。炭化物を多量に含む黒色土。中層より土師器壺底部(37)、上層より角棒状不明鉄製品(48)・加工材。SD03以东、遺構の密度が急激に薄くなる。

SD04 (図19 写真10) LG-175区南壁・北壁にて検出。直線的な南北溝と思われる。東西幅、確認面にて50cm、底面にて20cmを測る。覆土は明黄褐色砂質土を小塊状に多量に含む黒褐色粘性土で、しまり極めて強い。底面の高低差が北と南で全くない。断面形は南北ともU字の同形となる。出土遺物なし。

旧通水堰：苗代堰(岡本遺跡最東地点)(写真15) JA・JB-199・200区で検出。合わせて東西幅およそ20m程度、南東から北西へ流れる用水堰であり、確認した旧堰位置及び形態は現況とはは変わりなし。現在コンクリート製の通水路が用水堰の一部として道路を横断しているが、下部に旧苗代堰覆土を確認した。現況は1条の堰であるが、下方では2条の堰が確認できた。それぞれ幅8~9m程度の堰であるが、異なる時期に機能していたのか、同時期に2条機能していたのか覆土の層序からは判断できなかったため不明である。覆土より現代磁器・ガラスなどを確認。西側の改修も近代以降であるが、東側の改修は近年の工事であることが推察できた。

## 柱穴

Pit01 (写真10) SI02にて検出。

Pit02 (写真10) LB-164区南壁で検出。東西幅(直径)20cm。現地表土下30cmで確認し、底面は68cm下となる。平面形不明でほぼ垂直な掘り方を呈する。暗褐色土の単層で、出土遺物なし。

Pit03 (写真11) SI03にて検出。

Pit04 (写真11) LA-165区の北壁で確認。南北25cmを測るが東西幅、平面形ともに不明。現地表土下36cmで確認し、底面は現地表下76cmとなる。黒色土覆土で、出土遺物なし。

Pit05 (写真11) LA-166区南壁にて検出。東西15cmを測るが、南北幅及び平面形は不明。現地表土下30cmで確認し、地表下45cmで底部となる。覆土は黒色土で、出土遺物なし。東に2m離れた地点にて検出したPit06が同規模の柱穴であり、同一の建物柱穴である可能性がある。

Pit06 LA-166区南壁にて検出。東西幅15cmを測るが、南北幅及び平面形は不明。現地表土下30cmで確認し、地表下42cmで底部となる。覆土は黒色土で、出土遺物なし。Pit05と同様に柱痕跡・抜き取り痕跡など確認できない。建物柱穴としてPit05との関係が考えられる。

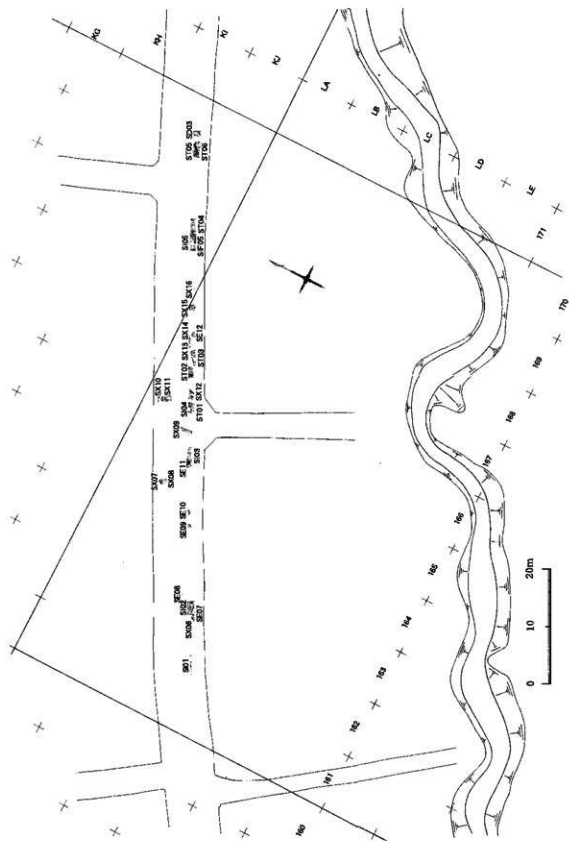
Pit07 ST02にて検出。

Pit08 ST04にて検出。

Pit09 ST04にて検出。

Pit10 ST05にて検出。

图18 岡本遺跡遺構配置図



Pit11 ST06にて検出。

Pit12 (写真11) KH-177区南壁で検出。東西幅が確認面にて50cm、底面にて16cmとなる。平面形不明。現地表土下50cmから確認し、地表下130cmで底面となる。SX19と重複しているが、同時期の可能性もあり、SX19を堅穴建物跡とした場合の柱穴であった可能性も考慮される。

Pit13 (写真11) KE-177区で検出。現地表土下67cmにて検出。上部は削平されているようで、深さ3cm程度しか残存していなかった。平面形は隅丸四角形を呈し、長径22cm、短径18cmを測る。黒色土(10YR1.7/1)の単層で出土遺物なし。

Pit14 (写真11) JB-183区北壁で検出。現地表土下88cmにて検出。表土下120cmで底面に至る。確認面では一辺21cmの角形を呈していた。黒色土の単層で、現代の工事埋め戻し土と思われる褐色粘性土の層上から掘り込まれているため、新しいと思われる。道路工事時の杭(柱)に伴うものであろうか。

#### 性格不明遺構

SX01 (図17 写真11) LI-152区北壁・南壁にて検出。平面形は方形となる可能性もある(壁面が隅凹区を平行に横断している)。但し、北側への下水道管引き込み工事にて検出できなかったことから、北側へは確認箇所以上に広がらないことが判明している。東西幅180cm、深さは表土下45cmで確認でき、底面までは表土下60cm。覆土は焼土・炭化物を1%含む黒色土で出土遺物はない。

SX02 (図17 写真11) LH-155区北壁にて検出。平面形不明。東半分が攪乱を受けているため、断面形も不明。皿形の可能性が考えられる。覆土は黒色土を呈し、出土遺物なし。

SX03 (図17 写真12) LF-158・159区北・南壁にて検出。表土下60cmで確認し底面は表土下72cmとなる。東西幅280cm。平面形不明だが、方形の可能性も考えられる。覆土は焼土・炭化物・褐色粘性土ブロックを小塊上に20%含む黒色土。南壁東端にて、地山の赤変が見られたため、当初カマドなど燃焼施設の存在を考慮し、SIの可能性も検討したが、確証をもてないためSXとした。出土遺物なし。

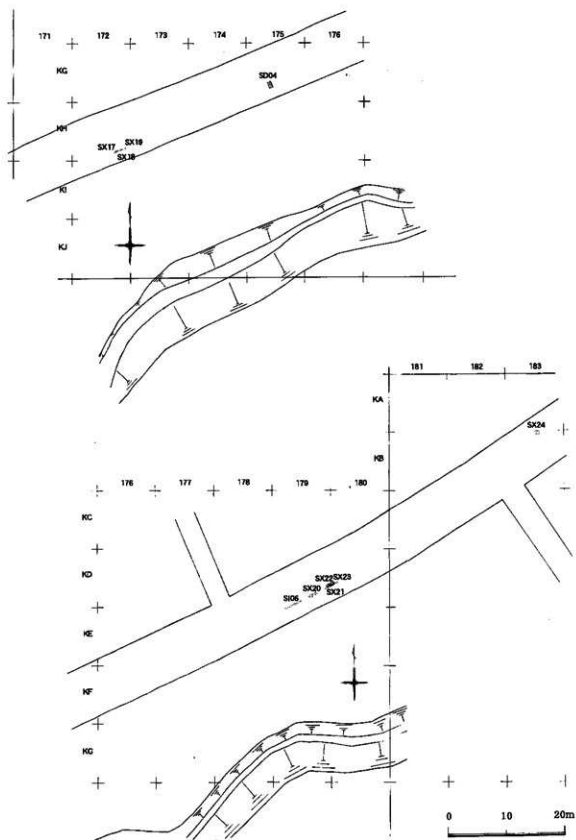
SX04 (図17 写真12) LF-159区北壁でのみ検出。平面形不明。現地表土下60cmで確認し底面は現地表土下100cmに位置する。覆土は焼土・炭化物・褐色粘性土ブロックを含む黒色土で出土遺物なし。

SX05 (図17 写真12) LE-159区北・南壁にて検出。東西幅150cm、現地表土下60cmで確認したが底面は現地表土下250cm以上あったと思われる(深さ未確認、工事施工者の話では250cmまでの掘り下げで底面が確認できなかった)ため、井戸の可能性も高い。ただし、断面等を確認できなかったため、ここではSXとして報告する。確認した遺構断面の上部は、井戸の西部にテラスがついたような形をしているが平面形は不明。南壁・北壁セクションの対応を考えた時、平面の広がりイメージしにくい。掘り方はしっかりとしており、壁がほぼ垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土に、黄褐色粘性土の塊の中塊状に20%、炭化物粒を多量に含む。しまり強い。覆土から、天目茶碗(図21 27、28、30)・銚貨(銚銭・56)。更に南壁覆土より天目茶碗(図21 29)、北壁覆土(井戸状部分)より刀子(47)・炭化材多数が出土している。

SX06 (図18 写真12) LC-162区南壁にて検出。東西幅15cm以上(工事が進行しており、全形の確認が不能だった)。現地表土下50cmから確認し、底面は現地表土下70cmまで確認できた。覆土は黒色土主体で、出土遺物なし。掘削時に立会いできず、半ば埋め戻した時点で確認したため、全容不明。掘り方からは、井戸跡の可能性も考えられる。

SX07 (図18 写真12) LA-164区東壁で検出。南北幅50cmの広がりもち、現地表土下22cmから確認し、

図19 岡本遺跡遺構配置図



地皮下62cmで底面となる。NTT新旧管およびSX08よりも旧。覆土は炭化物和バミスを極小～小粒状に1%含む暗褐色土。出土遺物なし。底面は掘り方がはっきりとしておらず、近現代の工事痕跡の可能性もある。

**SX08 (図18 写真12)** LA-164区東西壁にて検出。南北105～120cm程度を確認した。現地表土下34cmから確認し現地表下58cmで底面となる。SX07より新、NTT旧管工事よりも旧。覆土は、白色バミスを3%極小粒状に含む暗褐色土。壁の立ち上がりが若干見られるが、上半分を削平されているため詳細は不明。出土遺物なし。S101と同一遺構の可能性もあったが確認できなかった。

**SX09 (図18 写真12)** LA・LB-165区南北壁にて検出。東西幅100cm以上で、現地表土下50cmから60cmまでに薄く覆土が堆積する。道路舗装に係る砕石下に褐色粘性土があり、粘性土直下に広がる黒色土が遺構覆土と思われる。遺物は播鉢や磁器皿、不明褐釉磁器、不明土製品などの近現代と思われる遺物が褐色粘性土から出土しているが、黒色土からの出土遺物はない。

**SX10 (図18 写真12)** LA-166区東西壁にて検出。南北幅90cm以上となるが、掘削範囲が途中で切れるためにそれ以上は確認できなかった。現地表土下54cmで確認し現地表下220cmで底面となる。平面形は不明。SX11より新、NTT新管より旧。黒色土主体の覆土であるが、道路北端の歩道工事に係る掘乱層(ビニール混在)を切るため、現代の掘削痕と思われる。出土遺物なし。

**SX11 (図18 写真12)** LA-166区東西・南壁にて検出。南北幅(残存部)190cm、現地表土下34cmから確認し、現地表下58cmで底面となる。平面形不明。黒色土に、焼土・炭化物・明黄褐色粘性土を小～大塊状に2%、板状に2%、バミスを極小粒状に5%、灰も含む(分層可能)。土師器裏側部～底部破片、現代磁器を出土したが、遺構上部を覆う褐色粘性土から現代磁器とビニール袋が検出されることから、覆土中の現代磁器も褐色粘性土からの落ち込みかもしれない。南側に検出したSX12と同一遺構の可能性はある。

**SX12 (図18 写真13)** LA-166区南北壁にて検出。南北に対してほぼ平行な軸をもつ遺構で、東西幅150cm、現地表土下47cm以下まで確認したが、底面までは確認できなかったため深さ不明。焼土を含む黒色土と黒褐色粘性土が堆積している。出土遺物なし。北側に検出したSX11と同一遺構である可能性がある。

**SX13 (図18 写真13)** LA-166・167区北壁で検出。東西幅110cm、現地表土下47cmで確認し、底部は表土下52cmまで。平面形不明。上半部を削平されており、黒色土が極薄く残るのみ。壁の立ち上がりは明瞭だが、詳細は不明である。出土遺物なし。

**SX14 (図18 写真13)** LA-167区北壁で検出。東西幅75cmであるが、平面形は不明。現地表土下47cmから現地表下57cmで底面を確認。覆土は黒色土主体となり、灰層を1層挟む。東側に一段高い段差がある。出土遺物なし。

**SX15 (図18 写真13)** LA-167区調査区中央で検出。東西幅(残存部)80cm。現地表土下45cmから95cmで底面となる。平面形は円形と思われるが詳細不明。覆土は黒色で、出土遺物なし。

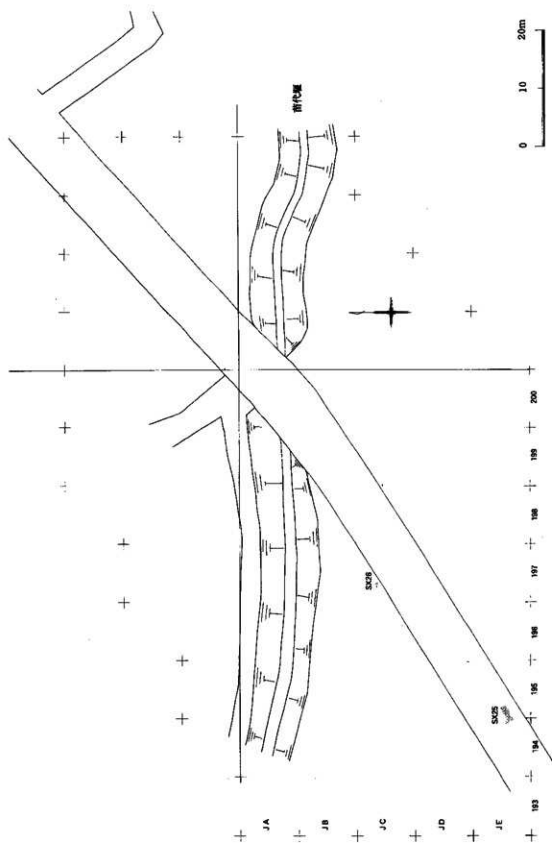
**SX16 (図18 写真13)** KJ-167区南壁にて検出。東西90cm、南北15cm。現地表土下44cmから64cmで底面となる。断面は不整形で、覆土は炭化物を小粒～中粒状に含む黒褐色土である。出土遺物なし。

**SX17 (図19 写真13)** KH-172区南壁にて検出。東西80cm以上で、現地表土下50cmから現地表下82cmで底面となる。平面形不明。東側に幅20cm程度の壁溝状のくぼみがある。覆土は黒褐色土で、土師器片・土師器裏側部が出土した。S1の可能性もある。西側への広がりと、SX18との関連は不明。

**SX18 (図19 写真13)** KH-172区南壁にて検出。東西47cm以上を確認したが、平面形は不明。現地表土下50cmから表土下61cmで底面となる。東側にあるSX19、西側にあるSX17との関連は不明。出土遺物なし。



图20 岡本遺跡遺構配置図



SX19 (図19 写真13) KH-172区南壁にて検出。東西43cm、現地表土下50cmから表土下80cmで底面を確認した。覆土は上層：黒褐色土、下層：薄く赤褐色焼土が堆積する。出土遺物なし。Pit12より旧、SX18との関連は不明。Pit12がSX19に付属するならばSIになる可能性があるかもしれない。

SX20 (図19 写真13) KD-179区南壁・北壁にて検出。東西幅150cm以上を検出。現地表土下75cmから表土下85cmで底面となる。西側範囲を確認したが、平面形は不明である。覆土は黒褐色粘性土で、焼土を多量に含む。南壁にて部分的に地山の赤変を確認したが、上部は削平が著しく東側の遺構範囲を確認することができなかったため、燃焼施設の存在については不明であった。出土遺物なし。

SX21 (図19 写真14) KD-179区南壁で検出。東西幅400cmで、現地表土下70cmにて確認。遺構覆土が極めて薄いため平面では確認が難しかった。覆土厚最大10cm程度で、黒色土に黄褐色ロームを小塊状に10%含む。東側に粘性土のブロックによるカマド袖状の立ち上がりとし、粘性土の下にも地山の赤変が見られることから、カマドの可能性もある。遺構底面(床面)のしまり強く、貼り床の可能性もある。平安の住居跡とするとSIの可能性もあるが削平が著しく遺構の判定に至らなかった。出土遺物なし。SX22・23より新。

SX22 (図19 写真14) KD-179区平面・南壁セクションにて検出。東西幅120cm。平面は円形で、断面は皿形を呈する表土下75cmで検出し、81cmで底面となる。覆土は中層：層厚5～8cmで黒色土(10YR1.7/1)となり魚骨や灰を含む。土師器杯口縁部が出土。下層：層厚3～5cm。暗褐色土(10YR2/2)で魚骨や灰を含むが、中層より多い。出土遺物なし。SX21・SX23よりも旧。SX21との重複関係は不明。

SX23 (図19 写真14) KD-179区平面・南壁セクションにて検出。東西幅100cmで、円形となるかもしれないが詳細は不明である。断面は東側に切れ上がる鍋底形を呈する。覆土は、中層：黒色土(10YR1.7/1)が25～30cmほど堆積し、魚骨や灰を含む。下層：黒色土(10YR1.7/1)が5～8cmほど堆積し、魚骨や灰を含むが、中層より含有量は多い。覆土上層より土師器杯口縁部。重複関係はSX21より旧で、SX22より新。

SX24 (図19 写真14) JB-183区東西北壁で検出。平面形不明。現地表土下80cmで確認し、底面まで残存深20cmとなる。覆土は黒色土主体で出土遺物なし。Pit14との関連については不明。

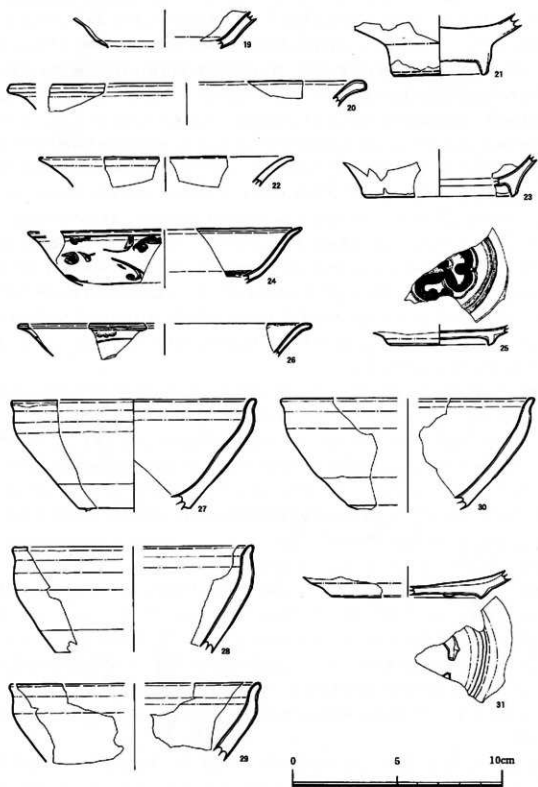
SX25 (図20 写真14) JE-194・195区南北東壁にて検出。東西幅300cm、南北幅170cm以上で、現地表土下70cmから地表下100cmで底面を確認した。平面形は方形に近いが詳細は不明。覆土は炭化物と若干の焼土を含む黒色土。底面の掘り方が一定しておらず、断面も不定形となる。出土遺物なし。

SX26 (図20 写真14) JC-197区北壁にて検出。東西幅90cm、南北幅60cmほどを確認した。現地表土下64cmから表土下74cmで底面となる。覆土は黒色砂質土で、断面観察によるとSI状ではある。しかし、SIと決定するには壁の立ち上がり及び床面が明確ではないためSXとした。出土遺物なし。

## 2) 出土遺物(図21、22、23 写真15、16)

陶磁器 青磁皿は、ST04出土の青緑色を呈する後花皿(19)で、腰が折れて外反する胴部片である。青磁碗は、ST05出土の青緑色の釉調を呈し外反する口縁部(20)と、ST06出土の高台部(21)がある。高台部は、胎土が比較的軟質な明黄褐色を呈し、やや白濁ぎみの不透明な灰緑色釉が不均一にかかる。SE11出土の白磁端反り皿は口縁部(22)と高台部(23)がある。口縁部は、やや灰色がかかるが、両者とも器形は高台部から直線的に開く朝顔状の形態を呈する。染付皿はST05出土の胴部片(24)とST06出土の底部片(25)、SE09出土の口縁部片(26)がある。(24)は腰部から口縁部までの破片で、外面口縁に一条の回線、胴部に唐草文、腰部下に一条の回線が描かれ、内面は口縁に一条の回線、見込みに二条の回線と玉取獅子?が描かれている。

图21 阿本遗址出土陶磁器实测图



(25)は底部片のみであるが、見込みに残存文が描かれ、回線が二条巡る。(26)は口縁部の小片であるが内外面共に褐色の呉須により施文がなされている。SF09出土の瀬戸美濃灰釉皿(31)は見込みに厚く灰釉があるので、内外面共に貫入が入り、全面に施釉が施されている。高台内にはトチンが残る。(30-a, b)はSX05出土の瀬戸美濃と思われる天目茶碗である。器形としては瀬戸大窯第3段階後半から第4段階前半にあたり天正の終わりのころ(1590年前後)のものと思われるが、高台の削りだしが立ち気味となっており、成形が鈍い印象がある。釉調は茶褐色で、露胎部の一部に錆が施される。胎土には長石の細粒が含まれ、通常の瀬戸美濃の胎土よりもきめが細かい印象がある。(27)はSX05出土の越中瀬戸の天目茶碗と思われる。器形的には瀬戸大窯第3段階に相当すると思われる、露胎部に錆が施される。内面及び外面胴部上半には緑色に近い釉を施すが、口縁部は釉が薄く茶褐色となる。胎土は硬質・灰色でぬめりのあるものとなり、胎土の焼成は良好である。釉が緑色に近いのは、鉄釉に灰等が混合されたことで、焼成時の溶融温度が上昇しており溶けきらない状態で窯から出たためと思われるが、作成時に意識して釉を製作したのか否かは不明である。愛知陶磁資料館の井上喜久男氏からは「黄天目」と表現すべきではないかとの教示をいただいた。(28)はSX05出土の越中瀬戸の天目茶碗で、胎土の状態は(27)とほぼ同様に堅緻であり、露胎部に錆が施されている。内外面に明茶褐色の釉がかかるが、釉を持ち上げて長石の吹き出しが認められる。口縁形態からは(27)と同様に瀬戸大窯第3段階に分類できそうである。(29)はSX05出土の産地不詳の天目茶碗である。越中瀬戸の可能性もあるが、胎土は酸化されたような明赤褐色(2.5YR5/6)で、長石粒を含み堅緻なものであり、越中瀬戸の胎土に近い印象がある。釉は、内外面とも赤みがかった赤灰色で焼成温度が不足したのか梅花皮状となっている。口縁部の形態からは、瀬戸大窯第3段階に相当する時期区分が考慮される。その他、珠洲系壺胴部がSE03の底面から出土している。

土師器 甕(32・SI04出土、34・SI05出土)は口縁の外反が少なく直立きみに立ち上がるもので、口縁の内外面は横位の臺で調整がされている。同じく甕の底部と思われる破片の内、(35)はSI05から出土した。底部が砂目で、外面に甕削りの痕が明瞭に残る。(36)はSI05出土で内外面とも丁寧な調整を行い、底部は糸切痕が見られる。胎土は砂粒が少なく坯のようなきめ細かさがある。(37)はSD03出土で底部を回転糸切で切り離した後に調整をかけているもので、(38)は外面に火を受けており、赤色に変化している。(33)は、SI04出土で口縁部が緩やかに立ち上がり直径が30cm程度になるかもしれない。鉢状の器形を想定できるが、坯と同様の胎土と器厚であるため、器形が判断しにくい。

須恵器 SI05から坯(39)と甕(40・41)の破片が出土している。

鉄製品 角釘(42・SI03出土、44・ST04出土)は2点とも先端が折れ曲がり欠損しているため、長さが不明である。残存長は、(42)が4cm、(44)が3cmである。(43)はST04出土の半引金(半引鋸)で、一部木質部が残存しており、幅7cm、刃部の高さ1.6cmと比較的小ぶりである。(46)はSF01出土で全長10.3cm、最大幅2cm、厚さ0.5cm程の全体が緩やかにカーブし、外側の一端が刃部状に薄くなっている用途不明鉄製品である。(47)はSX05出土の刀子の一部と思われる破片で、残存長6cm、幅1.2cm、厚さ5mmを測る。(48)はSD03出土の角棒状鉄製品で長さ23.5cm、ほぼ1cmの太さとなるが、両端が欠損しているため、全長及び全形は不明である。

銭貨 元〇〇貨(49)、景德元貨(50)、元祐通寶(51)、大観通寶(52)、政和通寶(53)、政和通寶(54)、永樂通寶(55)の7枚がST05から、徳銭(56)がSX05から出土している。中でも、元〇〇貨・景德元貨が一括して出土したが、元〇〇貨にひもの一部が残存しており、襷状態であったことを推想させる。また、政和

图22 出土土師器·須惠器实测图

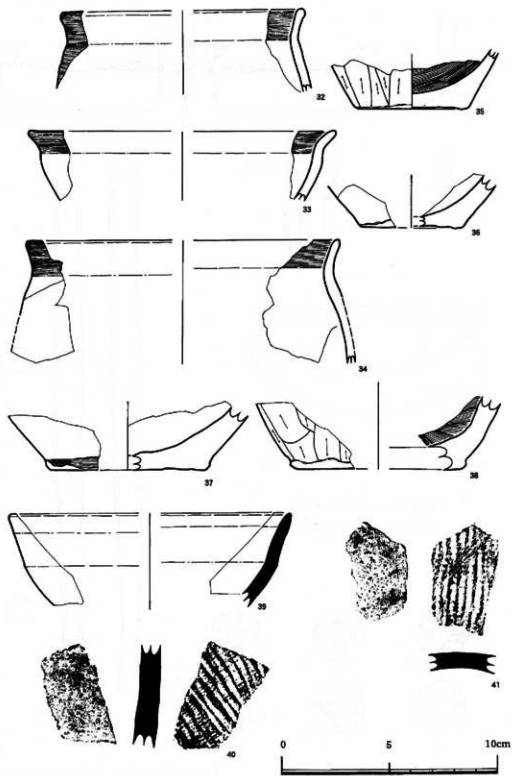
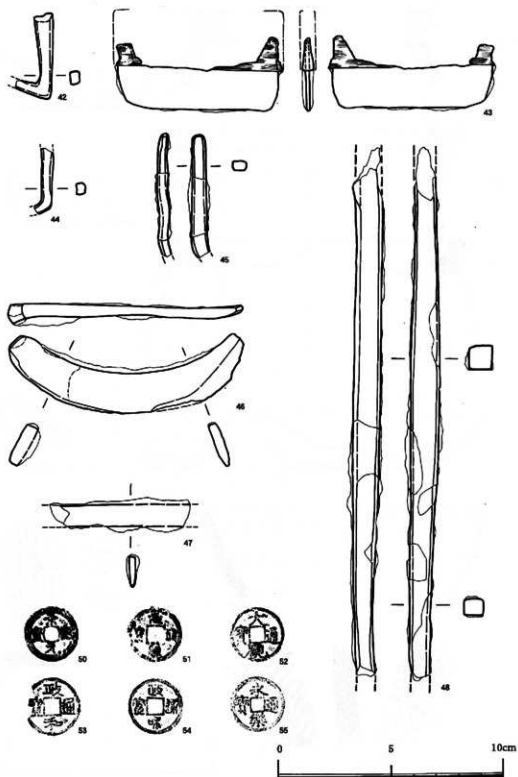


图23 出土鉄製品・銭貨実測図



通貨・永楽通貨・元祐通貨の3枚が密着して、木灰状の遺存物とともに出土しているが、銭貨を木製の箱等に取っていたものかもしれない。

#### 岡本遺跡出土の天目茶碗と五本松村、大豆坂通りについて

SX05出土の天目茶碗については、製作技法からは瀬戸美濃系の碗であろうと思慮したが、従来浪岡城跡で出土していた瀬戸美濃系陶器と胎土が異なり、硬質・堅緻な印象を強く受けた。

このため、生産地を確定する目的で当該茶碗について、愛知陶磁資料館の井上喜久男氏と瀬戸市埋蔵文化財センターの藤澤良祐氏の両氏にご教示を賜わるとともに瀬戸美濃遺物との比較を行った。

両氏ともに、図21-27、28、29（写真16-27、28、29及び巻頭カラーの上段3点）については、瀬戸美濃の天目茶碗ではないことを第一に指摘された。その上で、大窯第3段階前後から第4段階前半まで、16世紀末（天正末、1580から90年代）の資料と推定されること。図21-27は、標準土色帖で示すと7.5Y5/2（灰オリーブ色）となる色変わり（？）の天目茶碗であるが、当時は全国的に色替りが珍重されたことから、窯変の天目茶碗を製品として流通させていたであろうことを指摘された。製作窯としては、両氏とも「越中瀬戸であろう」との見解を頂いた。

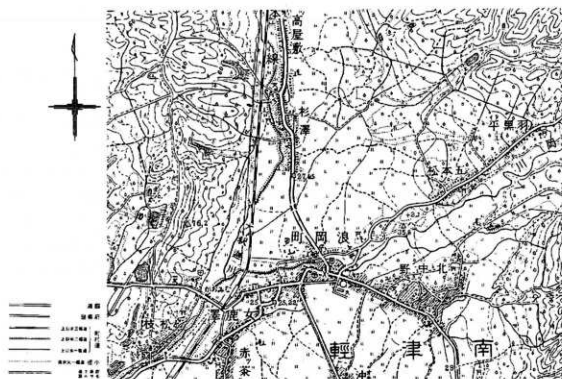
さらに、越中瀬戸を研究しておられる富山県埋蔵文化財調査事務所の宮田進一氏にご教示を受けると、天目茶碗の器形は越中瀬戸でも成立期に近い黒川窯、小森窯、山下窯の製品が考えられるが、灰オリーブ色の釉は17世紀の窯である東黒牧窯に見られる釉であり、天正期にこの釉を施した天目茶碗を製作していることは考えにくいとの判断を頂いた。いずれにせよ、越中瀬戸の窯は表採資料が主であり、本格調査が行われていないことから、時代と窯を決定するのは難しいことも指摘された。

越中瀬戸と瀬戸美濃の年代観をそのまま適用すると、天正六年(1578)の落城と伝えられる浪岡城は、落城後も隣接する五本松地区に集落(または寺社等の何らかの施設?)が形成され、17世紀初頭まで城館の一部または城館に付随した集落が機能していたと考えられることになる。また、南部氏の記録による天正十八年(1590)の浪岡城落城も考慮すると、16世紀末から17世紀にかけて浪岡城が多様な形で利用されてきたことが推測される。いずれにせよ、天和絵図(天和四年、1684)には五本松御新田村と記録され、新田村の扱いを受けていることから、16世紀末から17世紀初頭の集落が一度途絶えるか、極端に縮小したと考えることが妥当なのかもしれない。

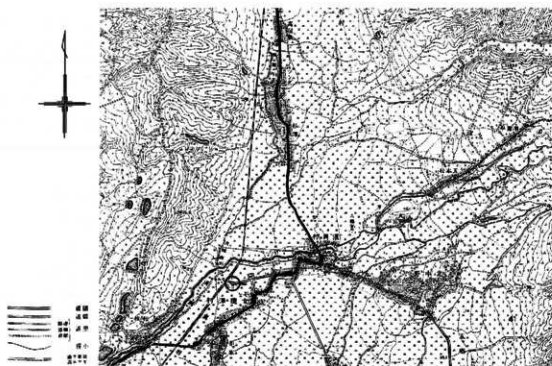
また、この際に五本松村を横断する旧主要道路の大豆坂通りが位置を替えている可能性も高い。SX05のみではなく、多数の竈穴建物跡や井戸跡等が大豆坂通りとされてきた道路直下で検出されたことは、15・16世紀段階までの大豆坂通りが現在の青森浪岡線と同一の場所には存在し得ないことの証明となる。

古道のルート考察にあたっては、一例として、明治初年の地租改正時に作成された図面(五本松財産区蔵・写真1)がある。この中で、浪岡城跡内を經由し、五本松地区の南側を通行する道が描かれているが、これは浪岡城の北に勧進したとされる五本松加茂神社の境内地南側へと続く道であり、集落の南端を通行する道でもある。前述の17世紀後半時の集落再編または近世・近代の集落の変遷にあたり、主要な通りも位置を移しバイパス的な最短距離を結んだことも考えられよう。いずれにせよ、16世紀末から17世紀にかけて、浪岡城跡と五本松地区に大きな変化があったことは類推するに易い。

図24 大正初期の浪岡城跡と大豆坂通り



大正元年の浪岡城跡と大豆坂通り(修正昭和28年)



大正五年の浪岡城跡と大豆坂通り





### 3) まとめ

五本松地区の西側は、これまで周知の埋蔵文化財包蔵地に含まれていなかった。しかし、史跡浪岡城跡や羽黒平(1)遺跡など、古代から中世の遺跡に開かれた地域であることを考慮すると、遺跡であっても、なんら不思議ではない。実際、立ち会い調査を行っただけで、遺物・遺構共に史跡指定地内に匹敵する検出数を数えた。特に、浪岡城跡(鷲谷環)から加茂神社までの区間は遺構が密であった。特に浪岡城跡新館地区東端部の墓へ向かう道路と交差する場所と、加茂神社西側住宅地への道路と交差する部分では井戸跡を含め、堅穴建物跡等を非常に密な状態で検出した。井戸跡(SE)については、2基から3基が隣接して検出されることが多く、中世堅穴建物跡(ST)についても重複して検出される例がままた見られた。このことのみから、一定の規則性(地割や遺構配置)を推定することは無謀ではあるが、史跡内の北館等や伝説の「七日町村」を考慮した場合、規則性を持った「町屋」や「屋敷地」、「寺社領域」のような景観を想像することができる。しかし、わずかに幅1m足らずのトレンチであるため、今後も五本松地区の開発に即した調査を行い、地域全体の遺構配置と(大豆坂)通りの位置を検討してゆく必要がある。

遺構を個別に見てゆく前に、遺構分類については仮分類であることをあらかじめ表記しておく。たとえば、堅穴建物跡のSI、STと性格不明遺構のSXは遺構の一部のみがトレンチにかかったため、全形を確認することはできなかった。このため、仮の遺構分類としたものであり、本発掘調査を行えば遺構種類の分類も再度見直す必要があるということである。

最初に、堅穴建物跡については、古代と思われるカマドを持った遺構が150区近辺を西端として検出している。しかし、古代の堅穴建物跡については、さらに西側の史跡浪岡城跡新館地区内でも検出している(平成14年度浪岡町文化財紀要Ⅲ参照)ことから、五本松地区内でも調査によりさらに遺構配置範囲が広がることが考えられる。羽黒平(1)遺跡の範囲を拡張することも考慮したが、羽黒平(1)遺跡と岡本遺跡の間に位置する苗代理副辺について遺構が全く検出されなかったため、前記2遺跡を同一遺跡とはしなかった。また、中世堅穴建物跡は古代の堅穴建物跡とほぼ同様の分布を示すが、同一箇所でも重複するものも多く、軸線も一定しないため発掘調査範囲を拡張しなければ全容はつかみきれない。井戸跡については、100m程度の範囲内で多数検出された。しかし、時期の判断できるものは数基しかない。また、史跡浪岡城跡内では検出した井戸跡の10%程度で井戸枠(隅柱横棧式)を有したが、今回検出の井戸跡からは枠が全く検出されなかった。地山の状態は史跡内とほぼ同様であるため、素掘りの井戸では崩落し長期間の使用は困難であると思われる。枠を有する井戸が検出されなかったのは時期の差異か、一時的な使用を意図したのか、ただ単に枠を有しない井戸部分を調査したことによるのかは不明である。

いずれにせよ、浪岡城跡跡よりも遺構数が多く確認できたことは、無名の館と岡本遺跡との城内での位置づけと利用上の差異が考えられよう。また、越中瀬戸の出土を考えた場合、17世紀段階(藩政後)においても交易を盛んに行い、越中瀬戸の天目茶碗という限られた流通しかない(と現時点では思われる)陶磁器を搬入してきた勢力は、浪岡城または津軽の中でどのような位置にあったものであろうか。色変りや越中天目茶碗からは、戦乱の中にありながらも陶磁器を嘆賞したであろう有力者を思い浮かべる。すなわち、戦国期における「婆娑羅大名」の姿や有力な寺社の姿を浪岡城で暮らす人々に重ねるものである。今後、五本松地区(浪岡城跡新館地区を中心とした)の開発等の機会をとらえて発掘調査を進めることで更なる発見・考察が進むものと期待する。

### 3. 羽黒平(1)遺跡

#### 1) 検出遺構

建物跡や、井戸跡、溝跡、性格不明遺構跡等は確認できなかった。柱穴については2基を確認している。

#### 柱穴

Pit01 IJ-202区で掘削後西壁にて確認。南北長20cm、東西長・平面形不明。現地表土下40～72cm。黒色土主体。遺物なし。近現代の可能性がある。

Pit02 IJ-202区で掘削後南壁にて確認。東西長20cm、南北長・平面形不明。現地表土下40～70cm。黒色土主体。遺物なし。近現代の可能性がある。

#### 2) 出土遺物

なし。

#### 3) まとめ

羽黒平(1)遺跡は、青森県埋蔵文化財センター(昭和48年度青森県埋蔵文化財調査報告書第8集・昭和51年度青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第44集・平成6年度青森県埋蔵文化財調査報告書第170集松山・羽黒平(1)遺跡)や浪岡町教育委員会(平成14年度浪岡町文化財紀要Ⅲ)により調査が行われている。

過去の調査では、平安時代の集落として認知されているが本年度の立会い調査では、遺構・遺物ともに確認できなかった。この結果が、既存の道路工事による削平が原因であるのか、単に遺構間を横断したのみであったのかの判断はつきかねる。いずれにせよ、羽黒平(1)遺跡の古代集落遺構がきわめて薄い部分であると思われる。東北縦貫自動車道の敷設工事に伴う発掘調査時には隣接地まで遺構が検出されており、遺跡範囲外とは考えがたいことから、今後の面的発掘調査に期待したい。

## 第4章 総 括

今年度の調査は、主要地方道の青森浪岡線（津軽地方から青森空港への旧道）であることから交通量が常時激しく、朝夕の調査時はもとより、日中でも担当者の1m以内を数十キロのスピードで大型トラックが通り抜けるなど、異常な状態での発掘・確認・立会い調査となった。本報告を記述しながら、作業員全員に事故・怪我がなかったことに改めて安堵している。

さて、今年度の上下水道工事に伴い、当初に調査計画を立てたが、史跡指定地隣接地についてはその位置関係から発掘調査を行うこととし、岡本遺跡部分についてはこれまで幾度となく舗装工事が行われてきた「旧大豆坂通り」であることと、史跡から若干離れた部分であることから遺構の検出は望めないのではないかと考え、発掘調査ではなく立ち会い調査に留めることとした。結果、遺構・遺物が多量に検出された岡本遺跡について、正確な平面・断面図が実測できない事態となり、担当者として恥じるばかりである。その中でも、工事を一時止めて協力いただいた(有)鎌田組と鞠丸恵三上建設の御両社には記して感謝を申し上げたい。

今年度の発掘調査成果は、前記の通り、調査としては不十分な観を否めないが、全体としては一定の成果を上げることができた。浪岡城遺跡と岡本遺跡の遺構種類の差が第一点である。

浪岡城遺跡は、堅穴建物跡や井戸跡のような生活密着型の遺構ではなく、溝（堀）跡のような城館を構成する大規模な遺構が主に検出された。一方で、岡本遺跡は、浪岡城遺跡と対極的に堅穴建物跡や井戸跡を主に、多数の生活遺構が検出されている。さらに、岡本遺跡では南北方向と東西方向に流れる溝跡が確認されており、その規模からも排水目的のみならず区画施設としての溝を考慮したほうがよいかもしれない。このことは、岡本遺跡内の集落（町屋）構造に影響するものであることから、今後も両者に調査を進める必要がある。

第二点は、浪岡城跡を含む存続年代の再考問題である。従来、天正六年落城とされ、100年後には曲輪上面は畑に、堀は水田として利用されてきたことが絵図や文書から読み取られてきたが、今回の調査及び出土遺物からは16世紀最終末から17世紀にかけての浪岡城跡と、周辺の町について何らかの形で継続して生活がなされていたであろうことが推測されるに至った。

第三点は、岡本遺跡の遺構配置から、北中野（源常平）へと南に向かう道路付近を境に中世（古代）の遺構が途絶えてしまう（図15）ことが見て取れる。今回、岡本遺跡については苗代塚までをその範囲としたが、この道路付近を境に岡本遺跡が括られる可能性も考えられる。

第四点として、前述の何点かの事柄を受け、大豆坂通りのルートは、現在考慮されている経路が近代段階の道路であり、中世まで上ると浪岡八幡宮から東の地域ではかなり異なっていたであろうことが推測されるに至った。例えば、その一例として、浪岡八幡宮東側を北上し、鶯谷塚沿いに東進。浪岡城跡新館地区北辺から東辺を経て、加茂神社南側の河岸段丘上を通り、源常平へと向かう道を南下。浪岡川沿いに東（青森方面へ）向かう道を考慮したい。これはあくまでも仮定でしかないが、遺構から見た状態や、明治・大正までの古地図からは、このような新たなルートを考慮しても良いのかもしれない。

以上、不十分ではあったが、今後研究課題を投げかけることのできる調査となった。

ふりがな	へいせい15ねんど なみおかまちぶんかざいきょう							
書名	平成15年度 浪岡町文化財紀要							
副書名	平成15年度 浪岡町上下水道工事に伴う発掘・立会い調査報告書 (浪岡城遺跡・岡本遺跡・羽黒平(1)遺跡)							
巻次	Ⅳ							
シリーズ名	浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書							
シリーズ番号	第11集							
執筆者名	木村浩一・竹ヶ原亜希							
編集機関	浪岡町教育委員会							
所在地	038-1311 青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村101-1 TEL. 0172-62-3004							
発行年月日	西暦 2004年 3月26日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号					
浪岡城遺跡 岡本遺跡 羽黒平(1)遺跡	浪岡町大字浪岡字 林本・前田、大字 五本松字岡本・平 野	02364	29073	40° 42° 56° ～ 40° 43° 24°	140° 35° 56° ～ 140° 36° 57°	約1,800㎡	5月12日 ～ 9月22日	下水道敷設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
浪岡城遺跡	城館	中世	堅穴建物跡(平安・中世)		土師器・須恵器・中世陶磁器、鉄製品、			
岡本遺跡	集落	平安	井戸跡(中世)、溝(堀)跡		銭貨、その他			
羽黒平(1)遺跡			柱穴、性格不明遺構		計 テンバコ約4箱			

写真 1

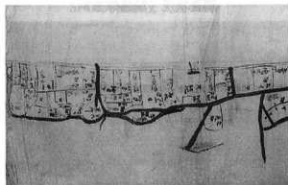
上下水道工事に係る調査区全景  
(実線の道路部分が対象区域)



右：岡本遺跡部分の拡大



明治期の五本松村と大豆坂通り



明治初年地租改正時の五本松地区  
(鷺谷塚の南側)

写真2 浪岡城遺跡



調査前（西端）



調査前（中央部）



調査前（無名の館）



調査前（東端）



調査状況（舗装除去）



SI01調査状況



SI01完掘（北から）



SE01掘り下げ（北から）

写真3 浪岡城遺跡

SH01・SH02・SH03  
確認状態



作業風景（左側が史跡浪岡城跡）



舗装除去状態



SH01掘り下げ状況（東から）



SH01堀幅（作業員間、南から）



SH02完掘状況（西から）



SH04完掘状況（西から）



SH04調査状況

写真4 浪岡城遺跡



SH05完掘状態（南から）



SH06完掘状態（東から）



SH07調査状況（東から）



SH10全景（西から）



SH10掘り下げ終了（西から）



SH10掘り下げ終了（西から）



SH10完掘（東から）



SH10木製品出土状態



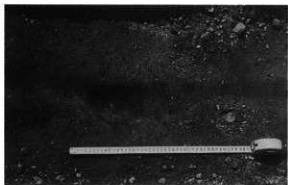
写真5 浪岡城遺跡



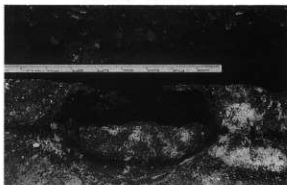
Pit01完掘（北から）



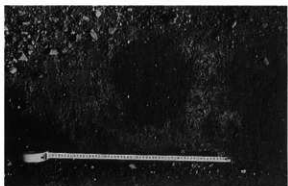
Pit02完掘（南から）



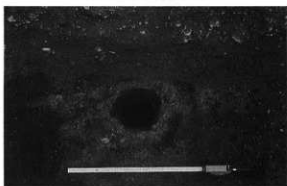
Pit03完掘（北から）



Pit04完掘（北から）



Pit05確認（南から）



Pit06完掘（南から）



Pit07確認（南から）



Pit08確認（北から）

写真6 浪岡城遺跡



Pit09確認 (東から)



Pit10完掘 (北から)



SX03完掘 (南から)



SX04完掘 (南から)



SX05完掘 (南から)



SX06完掘 (南から)



SX07完掘 (南から)



SX08完掘 (東から)

写真7 岡本遺跡



調査前 (遺跡西端)



SI01



SI02・SE07



SI03



SI04・ST01



SI05



SI06

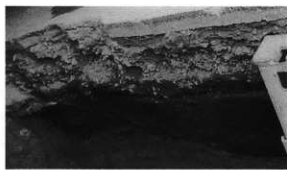


ST01

写真8 岡本遺跡



ST02



ST03



ST04



ST04



ST04・Pit08(右)・Pit09(左)完掘



ST05・Pit10完掘



ST05(左)・ST06(右)



ST06・SD02・Pit11完掘

写真9 岡本遺跡



SE01



SE02



SE03 (奥)・SE04 (手前)



SE05



SE06



SE08



SE09



SE10

写真10 岡本遺跡



SE11



SE12



SD01

釧谷埋



SD04



SD03



Pit01

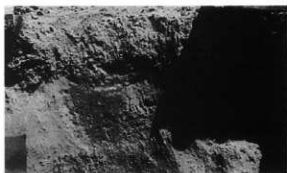


Pit02

写真11 岡本遺跡



S103・Pit03



Pit04



Pit05



Pit12



Pit13完掘



Pit14



SX01



SX02

写真12



SX03



SX04



SX05



SX06



SX07 (左)・SX08 (右)



SX09



SX10 (右)・SX11 (左)



SX10



写真13 岡本遺跡



SX12



SX13



SX14



SX15



SX16



SX17 (右)・SX18 (中)・SX19 (左)・Pit12



SX19 (中)・Pit12 (左)



SX20

写真14 岡本遺跡・羽黒平(1)遺跡



SX21



SX22



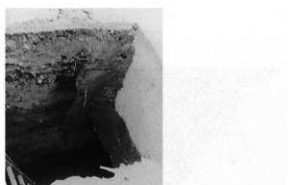
SX23



SX24



SX25



SX26



羽黒平(1)遺跡西端調査前



羽黒平(1)遺跡(西から)

写真15 羽黒平（1）遺跡、浪岡城遺跡・岡本遺跡出土遺物



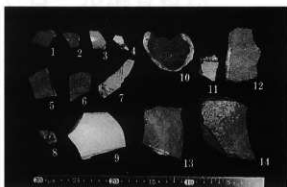
苗代塚



Pit01 (左)・Pit02 (正面)



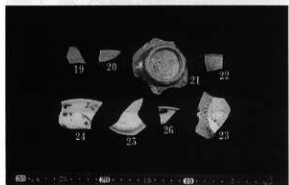
浪岡城遺跡出土陶磁器等 (表)



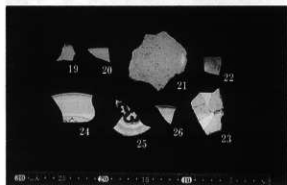
同左 (裏)



浪岡城遺跡出土鉄・石・木製品

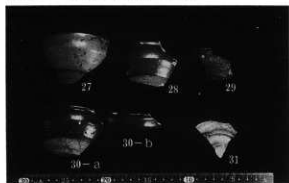


岡本遺跡出土陶磁器 (表)

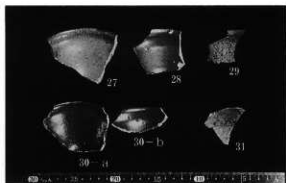


同左 (裏)

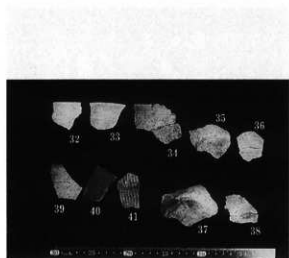
写真16 岡本遺跡出土遺物



SX05出土天目茶碗等（表）



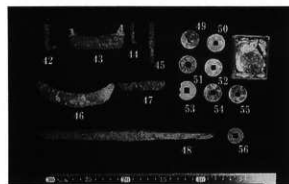
同左（裏）



土師器、須恵器（表）



同左（裏）



鉄製品、銭貨（表）



同左（裏）

平成15年度

浪岡町文化財ハトロール調査概報

## 1 調査経過

今年度の文化財パトロール調査は、青森県重要に指定されている旧坪田家住宅、円空作木造観音菩薩坐像2株、浪岡町指定文化財である楊子杉及び源常林の銀杏、埋蔵文化財包蔵地21遺跡を対象とし、下記の日程と体制で実施した。

なお、平成15年1月に町内毎戸回覧により、「遺跡保護のお願い」を配布して、埋蔵文化財包蔵地の周知を行なった。

調査の原因	青森県文化財パトロール事業
調査回数	5回 9月2日・9月9日・9月30日・10月24日・10月31日
調査員	青森県文化財保護指導員 成田昭美
調査事務担当部局	浪岡町教育委員会
教育長	成田清一
生涯学習課長	常田典昭
課長補佐	鎌出廣
文化班長	工藤清泰
文化班主任主査	小田桐勝昭(文化財パトロール調査担当)
文化班主任主査	木村浩一
臨時発掘調査員	竹ヶ原亜希

調査対象遺跡等  
(位置図参照) 下記26件。パトロール調査中に得られた遺物については、浪岡町中世の館で保管している。

付図に、調査位置を表記するにあたり、仮番号をつけて整理している。

## 2 パトロール調査を行った指定文化財・遺跡(カッコ内は遺跡番号)

### 1) 県重要及び町指定文化財

#### ① 旧坪田家住宅(県重要・建造物 浪岡町管理)

本住宅はかつて青森空港に隣接する王余魚沢地区にあった建物で、古民家の保存を目的として、現在浪岡町中世の館敷地内に移転・復原している。正確な建築年代は不明であるが、構造の特徴から江戸時代末期の建物とされる。平成15年4月の暴風により建物背面に拡張した庇部分の柱屋根が崩壊しているため、早期に修理をする必要がある。

#### ② 円空作木造観音菩薩坐像(県重要・彫刻 西光院所有)

江戸時代初期の寛文年間に、円空が制作したものとと言われる。指定前からの欠損補修部分はあるが、現在の保存・管理状態に問題はない。

#### ③ 円空作木造観音菩薩坐像(県重要・彫刻 元光寺所有)

江戸時代初期の寛文年間に、円空が制作したものとと言われる。現在の保存・管理状態に問題はないが、過去、山頂の釈迦堂に安置されていた際に仏像を鉄釘で補強しており、この部分に錆による損傷、及び虫害が見られるため、早期に保存・修理をする必要がある。

#### ④ 源常林の銀杏(町指定 天然記念物)

津軽山唄のもと唄として伝わる一節に「浪岡の源常林の銀杏の木は、枝は浪西、葉は黒石、花は堀越の城で

咲く」とある銘木である。現在特に問題はないと思われる。

⑤ 楊子杉(町指定 天然記念物)

羽黒神社境内に根ざす大樹で、美人川伝説(都から来た姫が顔を洗った清流を美人川と呼び、お歯黒に使った楊枝が根付いて楊子杉となり、この場所を羽黒神社と呼ぶようになった、という伝説)に表れ、天和絵図にも描かれている。町文化財指定時に樹木治療を行なっている。一帯は町民の憩いの場、美人川公園として整備されている。

2) 正平津川流域の丘陵地に位置する遺跡

⑥ 正平寺遺跡(29033)

正平津川右岸の台地上に土壘、堀を巡らせた地形が見られる。果樹園、畑として利用され現状は維持されている。縄文土器、土師器片を表採した。

⑦ 細野遺跡(29034)

正平寺遺跡に隣接し、相沢神社裏手の丘陵地に位置する。畑、山林として利用され現状は維持されている。縄文土器、石器、土師器片を表採した。

3) 浪岡川流域の丘陵地に位置する遺跡

⑧ 強清水館遺跡(29053)

16世紀、浪岡北畠家臣であった強清水こわしみず水恵林が築った中世城館とされる。遺跡台帳に記載されている地図と照らし合わせながら踏査を行ったが、場所・範囲を特定できなかった。周辺は果樹園、山林として利用されている。

⑨ 屋形森遺跡(29032)

王余魚沢集落から通称「奥山」へ入る右手の山林と思われるが、範囲を特定できなかった。山林の入り口に土地所有者が周辺に伝わる伝説の説明板、遊歩道、水飲み場などを整備している。

⑩ 王余魚沢(1)遺跡(29029)

浪岡川右岸の河岸段丘上に位置し、宅地、果樹園等として利用されている。現在のところ開発計画はなく、現状は維持されている。

⑪ 王余魚沢(2)遺跡(29030)

遺跡台帳に記載されている地図と照らし合わせながら調査を行ったが、場所・範囲を特定できなかった。遺跡と思われる場所は山林として利用され、現状は維持されている。

4) 本郷川流域及び八甲田山から連なる丘陵地に位置する遺跡

⑫ 牧ノ沢遺跡(29046)

本郷ダムの右岸、牧ノ沢と田ノ沢が合流する東側の山林一帯である。開発計画が少ない地域であり、現状は維持されている。

⑬ 田ノ沢遺跡(29042)

遺跡と思われる場所は果樹園として利用されている。果樹園耕作者が、畑から出土したと思われる縄文土器片を教育委員会に届け出ている。

⑭ 篠原遺跡 (29041)

本郷集落北側の丘陵地で、果樹園として利用されている。昨年度発掘調査を行った中屋敷遺跡（『紀要Ⅲ』にて報告）の北東斜面に位置する。遺跡内に農道整備が計画されているため、平成16年度に発掘調査を予定している。畑部分から須恵器片を採した。

⑮ 吉内遺跡 (29039)

中世城跡とも言われ、吉内川左岸に一段高い血輪状の地形が広がる。昨年度発掘調査した中屋敷遺跡に隣接し、篠原遺跡から延びる農道の新設が計画されているため、平成16年度に発掘調査を予定している。

⑯ 博奕打ヶ沢遺跡 (29037)

高台にある果樹園の窪地が、周囲から見えないような地形となっている。果樹園として利用され、現状は維持されている。

⑰ 本郷遺跡 (29043)

遺跡内に大銀杏がある。宅地、畑として利用され、現状は維持されている。平成12年度に所在地、遺跡範囲の確認を行った際、遺跡の年代的な違いから本郷館遺跡部分を分離し、範囲を縮小した経緯がある。

⑱ 本郷館遺跡 (29069)

広さは東西南北約80m四方で、舌状台地の東側は人工の堀（現在は一段低くなっている共同墓地）で区切られていたと思われる。また、南側を流れる本郷川は、天然の堀として機能していたと考えられる。北側は一部水田になっているが、堀跡と思われる。現在は果樹園、宅地、共同墓地等として利用され、現状は維持されている。青磁（碗）、中国製染付（皿）片を採したことにより、中世城館であった可能性を想定することができた。

5) 大釈迦川右岸の河岸段丘上に続く遺跡

⑲ 大釈迦館遺跡 (29048)

外ヶ浜の押さえとして浪岡城の北方を防御した中世城館跡と言われ、地元では「館の畑」と呼んでいるが、中世の遺物は採されていない。水田を流れる大釈迦川右岸に曲輪と思われる地形が見られる。水田、畑として利用され現状は維持されている。

⑳ 山元（2）遺跡 (29055)

大釈迦川右岸から西側へ延びる低丘陵地で、果樹園として利用され現状は維持されている。平成16年度中に、国道7号バイパスが全面開通する予定であるため、遺跡周辺の開発が急進に進むことが予想される。今後、一層埋蔵文化財の周知徹底をはかる必要がある。土師器片を採した。

6) 梵珠山から南側へ延びる丘陵地の西側に位置する遺跡

㉑ 下下平遺跡 (29004)

範囲は特定できなかったが、南側は吉野田新溜池に面する一帯である。果樹園として利用され現状は維持されている。畑部分から縄文土器、土師器片を採した。

㉒ 旭（1）遺跡 (29005)

一面果樹園として利用されているため、遺物の採はできなかった。開発計画もなく現状は維持されている。東側は吉野田新溜池に面している。



㉔ 旭（２）遺跡（29006）

旭（１）遺跡に隣接し、吉野田新溜池と三太溜池に挟まれた部分である。開発計画もなく果樹園として利用され、現状は維持されている。縄文土器片を表採した。

㉕ 中平遺跡（29007）

南側は熊沢溜池に面し、宅地、学校、果樹園として利用されている広い範囲である。平成15年度農道整備に伴う発掘調査が行なわれた。土師器片を表採した。

㉖ 壺沢遺跡（29008）

吉野田新溜池と三太溜池下流の合流する沢地に面し、東側へ旭（１）、旭（２）遺跡へと続く。果樹園、畑として利用され現状は維持されている。縄文土器、土師器片を表採した。

㉗ 寺屋敷平遺跡（29069）

現在は一面果樹園として利用される。遺跡の西側は吉野田新溜池に面し、南北は沢地が入り込んでいる。平成15年度農道整備に伴う発掘調査が行なわれた。土師器、須恵器片を表採した。

### 3 新発見の遺跡

㉘ 浪岡城遺跡（29073）

当該地は、史跡浪岡城跡の隣接地である。平成15年度浪岡八幡宮付近から五本松地区まで実施された下水道工事に伴い、教育委員会が発掘調査を行った結果、古代・中世の遺物（土師器・陶磁器）や遺構（建物跡・溝跡など）が確認された。このため、史跡指定地境界の主要地方道青森浪岡線と、北側の鷺谷環までの範囲を浪岡城遺跡（浪岡八幡宮も含む）として登録した。

㉙ 岡本遺跡（29074）

周辺を史跡浪岡城跡と加茂神社遺跡、羽黒平（１）遺跡に囲まれた一帯である。平成15年度に実施された下水道工事に際し、教育委員会が立会い調査を行った結果、古代・中世の遺構（建物跡・井戸跡など）や遺物（陶磁器・鉄製品など）が確認された。このため、東端を羽黒平（１）遺跡の西端である苗代塚とし、南端・西端を鷺谷塚とする一帯を岡本遺跡として登録した。

浪岡町文化財パトロール調査箇所位置図



浪岡町文化財・

浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 一覽

## 浪岡町文化財一覧

浪岡町所在 指定文化財一覧(平成15年1月現在)

### (1) 国指定文化財

番号	種別	名称	員数	指定年月日	所在地	所有者・管理団体	備考	管理状況
1	史跡	浪岡城跡	1	昭和15年2月10日 追加:平成元年 3月7日	浪岡字五所・字 林本 五本松字松本	浪岡町	指定面積 136,300㎡	一部史跡 公園として 供用
2	史跡	高屋敷館遺跡	1	平成13年1月29日	高屋敷字野尻	浪岡町	指定面積 29,762.72㎡	指定地は 公有化済

### (2) 県指定文化財

番号	種別	名称	員数	指定年月日	所在地	所有者 (管理者)	備考	管理状況
1	考古資料	亀ヶ岡式室形彩色土器	1 個	昭和31年5月14日		個人		青森県立 郷土館にて 展示中
2	考古資料	亀ヶ岡式室形羽 状縄文土器	1 個	昭和31年5月14日		個人		
3	考古資料	亀ヶ岡式浅鉢形 台付土器	1 個	昭和31年5月14日		個人		
4	無形民俗 文化財	吉野田獅子(鹿) 踊	1	昭和36年1月14日	吉野田	吉野田獅子 踊保存会		
5	彫刻	円空作木造観音 菩薩坐像	1 体	平成2年8月3日	北中野字天王2- 2	西光院	昭和61年10月27日 町指定文化財	
6	彫刻	円空作木造観音 菩薩坐像	1 尊	平成9年5月14日	大釈迦字山田99- 3	元光寺	平成5年4月27日 町指定文化財	
7	建造物	旧坪田家住宅	1 棟	平成14年11月18日	浪岡字岡田43	浪岡町	平成6年12月8日 町指定文化財	中世の館 で管理

### (3) 町指定文化財

番号	種別	名称	員数	指定年月日	所在地	所有者・ 管理者	備考	管理状況
1	天然記念 物	源常林の銀杏	1	昭和55年4月28日	北中野字沢田107	浪岡町	高さ20.5m 幹囲6.47m	
2	史跡	伝北島氏墓所 (一)、(二)	2	昭和55年4月28日	①北中野字五輪 75の2 ②北中野字村元 153の4	浪岡町教 育委員会	指定面積 ①230.24㎡ ②330㎡	
3	考古資料	土偶	1	昭和55年4月28日		個人	高さ8.5cm	中世の館 で展示中
4	考古資料	波状文四耳壺	1	昭和58年11月21日		個人	高さ24.2cm	
5	絵画	石器土器図絵六 曲屏風	1 双	昭和58年11月21日		個人		中世の館 で展示中
6	絵画	石器図絵屏風・ 土器図絵屏風	各 半双	昭和58年11月21日		個人		

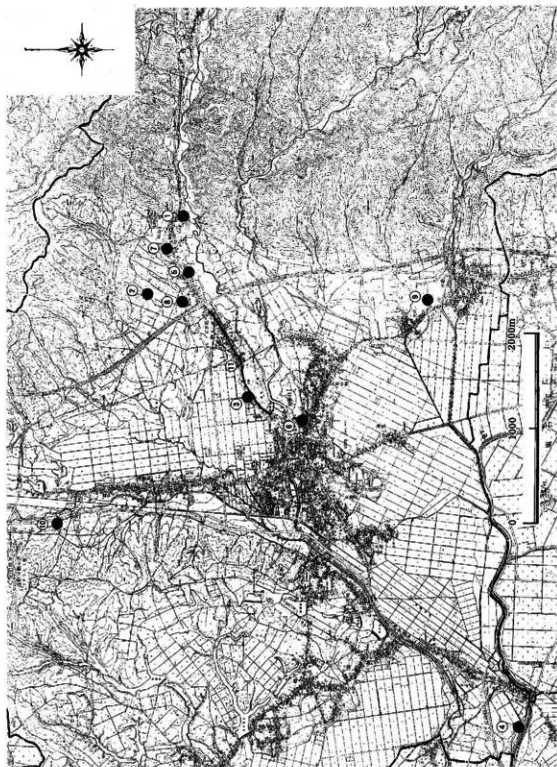
7	天然記念物	楊子杉	1	平成10年8月7日	五本松字羽黒平1	加茂神社 (羽黒神社)	高さ30m 幹囲4.64m	
---	-------	-----	---	-----------	----------	----------------	------------------	--

注：種別・名称・員数は、指定書のままに記載した。

### 浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書一覧（次頁位置図参照）

図中No.	書名		発行年
①	第1集	松山遺跡	1980
②	第2集	羽黒平（1）遺跡 五本松地区樹園地農道整備事業に係わる緊急発掘調査	1981
③	第3集	浪岡城跡－主要地方道青森浪岡線特殊改良一種工事に伴う発掘調査－	1986
④	第4集	大沼遺跡発掘調査報告書－平安時代の低湿地遺跡の調査－	1990
⑤	第5集	羽黒平（3）遺跡発掘調査〔試掘〕調査報告書	1995
⑥	第6集	川原館遺跡試掘調査報告書	2002
⑦	第7集	平野遺跡発掘調査報告書	2002
⑧	第8集	羽黒平（1）遺跡発掘・試掘・立会い調査報告書	2003
⑨	第9集	中屋敷遺跡発掘調査報告書	2003
⑩	第10集	野尻（4）遺跡 大釈迦工業団地開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2004
⑪	第11集	浪岡町上下水道工事に伴う発掘・立会い調査報告書 (浪岡城遺跡・岡本遺跡・羽黒平（1）遺跡)	2004

町内遺跡発掘調査報告所刊行遺跡位置図



## 訂正のお願い

平成14年度浪岡町文化財紀要Ⅲの中で、下位の部分を訂正ください。

訂正頁・箇所	行数・項目	誤	訂正内容
9頁・検出遺構	17行	図Ⅰ-3	図Ⅰ-2
12頁・検出遺構	22行・SD50	図Ⅰ-3	図Ⅰ-4
12頁・検出遺構	24行・SX50	図Ⅰ-3	図Ⅰ-4
14頁・表Ⅰ-1	6行・V層	黒色土(1.7/1)	黒色土(10YR1.7/1)
22頁・発掘調査抄録	14行・市町村コード	29	02364
32頁・検出遺構	30行・SE01	美濃瀬戸灰釉菊皿	美濃瀬戸灰釉菊皿
44頁・出土遺物	6行・陶磁器	美濃瀬戸菊皿は	美濃瀬戸灰釉菊皿は
49頁・発掘調査抄録	14行・市町村コード	29	02364
59頁・調査経過	24行・7月3日	無類壺出土	無類壺出土
60頁・調査経過	19行・8月2日	無類壺出土	無類壺出土
64頁・縄文時代の遺構	1行・SI01	無類壺1点	無類壺1点
65頁・縄文時代の遺構	7行・遺物包含層	有類壺形土器	有類壺形土器
65頁・縄文時代の遺構	8行・遺物包含層	無類壺形土器	無類壺形土器
86頁・出土遺物	4行・縄文土器	壺形(有頸・無頸)	壺形(有頸・無頸)
90頁・出土遺物	17行・壺形土器	有頸壺	有頸壺
90頁・出土遺物	17行・壺形土器	無頸壺	無頸壺
90頁・出土遺物	29行・壺形土器	口頸部	口頸部
92頁・出土遺物	2行・壺形土器	口頸部	口頸部
104頁・表Ⅲ-14	1行	陶磁器観察表(仮)	陶磁器観察表
112頁・まとめ	13行	無頸壺	無頸壺
112頁・まとめ	30行	無頸壺	無頸壺
113頁・まとめ	27行	分した区画文	分にした区画文
116頁・発掘調査抄録	3行・書名	平成14年度 中屋敷遺跡発掘調査報告書	浪岡町文化財紀要
116頁・発掘調査抄録	5行・巻次	第9集	Ⅲ
116頁・発掘調査抄録	6行・シリーズ名	浪岡町文化財紀要	浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 中屋敷遺跡発掘調査報告書
116頁・発掘調査抄録	7行・シリーズ番号	Ⅲ	第9集
116頁・発掘調査抄録	14行・市町村コード	229	02364

平成15年度  
浪岡町文化財紀要Ⅳ

発行日 平成16年3月26日  
編集 浪岡町教育委員会生涯学習課  
発行 浪岡町教育委員会  
〒038-1311  
青森県南津軽郡浪岡町浪岡字稲村101-1  
TEL 0172-62-3004 (直通)  
FAX 0172-62-9368

印刷 高金印刷株式会社  
〒038-0015  
青森県青森市千刈二丁目1-31  
TEL 017 (781) 2244



